

第2章 「道徳教育」の教材



低学年

基本的生活習慣

- No.1 かぼちゃの つる
- No.2 るっぺ どうしたの
- No.3 おじいさん はい お水
- No.4 イタリアの アサガオ
- No.5 ゆっき と やっち
- No.6 ぐみの木と小鳥
- No.7 あぶら山
- No.8 おゆうざかい

中学年

役割・協力

- No.9 トムトムが見たものは
- No.10 なしの実
- No.11 まどガラスとさかな
- No.12 小さなげき場
- No.13 神戸のふっこうはぼくらの手で
- No.14 にじ色のふん水
- No.15 雨のバスていりゅう所で
- No.16 勇太への宿題

高学年

自己有用感・責任

- No.17 最後のおくり物
- No.18 手品師
- No.19 ロレンゾの友達
- No.20 森の絵
- No.21 うばわれた自由
- No.22 はじめてのアンカー
- No.23 ぼくの草取り体験
- No.24 ヘレンと共に一アニー・サリバン
- No.25 天からの手紙
- No.26 こころざしを高く、今を熱く生きる

小学校 1・2年生 1学期 (規則正しい生活をする)

「かぼちゃの つる」

1) 主題名 わがままなふるまい 内容項目1ー(1)

健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。

2) 展開の概要

- ねらい つるがきれたときにかぼちゃが気付いたことを考えることを通して、わがままをしないで規則正しい生活をしようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 「ぼく、こっちへのびよう。・・・」

- かぼちゃは、どんなことを考えてぐんぐんのびましたか。

場面2 「かぼちゃのつるは、すいかのはのうえに・・・」

- かぼちゃは、なぜ、すいかのはのうえにつるをのばしていったのでしょうか。

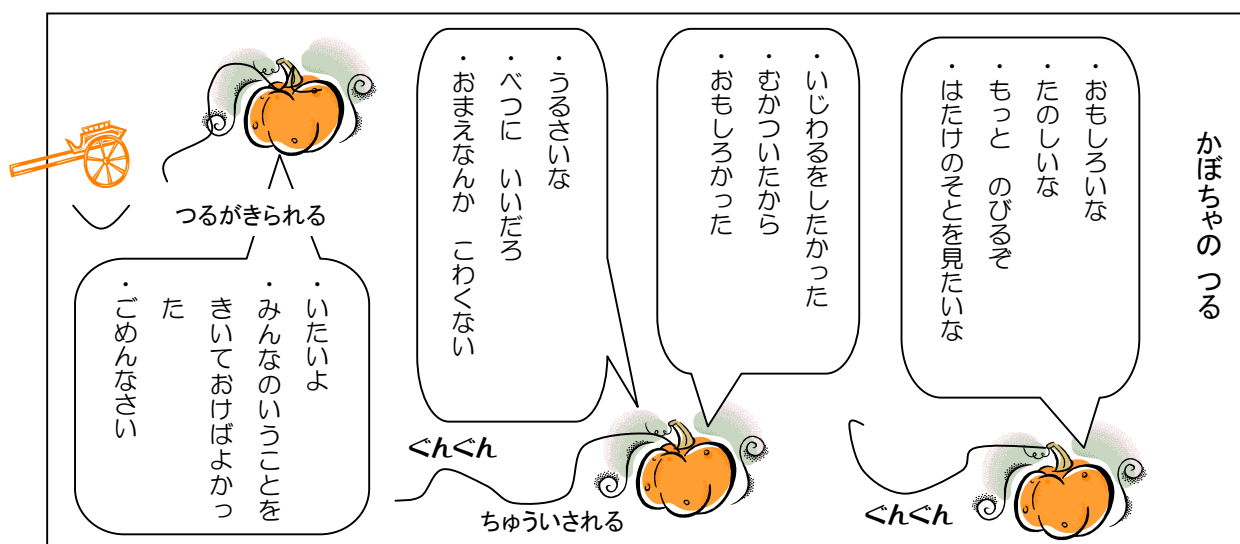
場面3 「ぜいたくいわない。またいで・・・」

- かぼちゃはつるをふみつけるこいぬに対してどんなことを思っていたでしょう。

場面4 「いたいよう、・・・かぼちゃは、ぼろぼろ、ぼろぼろなみだ」(中心場面)

- ◎ かぼちゃは泣きながらどんなことを考えていたでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 学級活動・特別活動(学級活動、学校行事)・体育(集団行動)
- 心のノート 「気持ちのいい一日」(1,2年用 14-17頁)

5) 読み物資料

かぼちゃのつる

あめいろの お日さまが、ぎんぎらぎんぎら、まぶしい あなです。かぼちゃばだけのかぼちゃのつるは、ぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんのびてきました。

「ほく、こっちへ のびよう。」

かぼちゃのつるは、はだけのそとへ のびていきました。

「かぼちゃさん、かぼちゃさん。」

みつばちが とんできて、よびかけました。

「なんだい、みつばちさん。」

「あ、ね。そっちへ のびては だめですよ。そこは、人のおともみちですよ。」

「人のおとも みちだって、そんなこと かまうものか。ほくみちぶさいで しまうんだ。」

かぼちゃのつるは、そう いうて、ききません。

みつばちは、ぶーん ぶーん。むこうへ とんで いきました。

「かぼちゃさん、かぼちゃさん。」

こんどは、ちようちよが とんできて、はなしかけました。

「なんだい、ちようちよさん。」

「あ、ね。こっちへ のびるより、そちらへ のびたほうが いいですよ。あなたの はだけは、まだまだ、すいていますよ。」

「いやだい。ほく、こっちへ のびたいんだい。よいいな おせっかいな ど しないでくれ。」

かぼちゃのつるは、ちようちよの ちゅういもきこうとは しません。ちようちよは、ひらひら ひらひら、みちの むこうの すいかばだけへ とんでいきました。

かぼちゃのつるは、みちを こえて、すいかばだけに のびていきました。

「かぼちゃさん、かぼちゃさん。」

と、すいかのつるが よびとめました。

「なんだい、すいかさん。」

「あ、ね、こは わたしの はただだから、はいうてこないでくださいよ。」

「なんだと、けちけちするな。ちようちよぐらゐ はいったっていいじゃないか。」

かぼちゃのつるは、すいかの たのみなど、きこうとは しないで、ぐんぐんぐんぐん、すいかばだけのなかに のびていきました。すいかばだけにはいりこんだ かぼちゃのつるは、すいかのつるの上を、へいきなかおでのびていきました。

「かぼちゃさん かぼちゃさん、そんな らんぼうを しないでくださいよ。」

すいかのつるは、かなしそつに たのみましたが、かぼちゃのつるは、すこしも きこうとは しません。

「かぼちゃくん、かぼちゃくん。」

そこへ、こいぬが とおりかかって、はなしかけました。

「なんだい、こいぬくん。」

「こは、ぼくや 人のおともみちだよ。こんな ところに のびては こまるよ。」

「せいたく いうない。またいでおれば いいじゃないか。」

かぼちゃのつるは、いじわるそつに こたえました。

「なんだと。おとなしく いえば いいきになって、なんてことをいうんだい。」

こいぬは おこつて、かぼちゃのつるを、どしん どしん、ふみつけました。

「へっへっへ……。おまえなんかにふまれたって、へいきのへいきさ。」

かぼちゃのつるが、へいきな かおを しているので、こいぬは あきらめて むこうへいって しまいました。

「ごん ごん ごん ごん。にぐるまを 人が ひいて、きました。そして、あつというまに、くるまのわで、ぶつりと、かぼちゃのつるを きって しまいました。」

「いたいよう、いたいよう、あーん、あーん……。」

かぼちゃのつるは、ぼろぼろ。ぼろぼろ、なみだを こぼしてなきました。

お日さまは、あいかわらず、ぎんぎらぎんぎら、てりつていました。

文部省 小学校 道德の指導資料

小学校 1・2年生 1学期 (規則正しい生活をする)

「るっぺ どうしたの」

1) 主題名 わがままをしないで 内容項目1ー(1)

健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。

2) 展開の概要

- ねらい まわりの人が困ることをするるっぺの姿を通して、わがままをしないで、規則正しい生活をしようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (おかあさんにおこされるけど、目があかない)

- おこされても、なかなかおきないるっぺは、どんなことを考えていたでしょう。

場面2 (うさぎのぴよんた君に、注意される)

- ぴよんたに注意されたるっぺは、どんなことを思っていたでしょう。

場面3 (すなばですなをなげ、みんなに「いいかげんにしてよ」と言われる)

- 「やだね」といいながら、るっぺはどんなことを思っていたでしょう。

場面4 (たぬきのぼんちゃんが、目をおさえて しゃがみこむ) (中心場面)

- ◎ ぼんちゃんが、しゃがみこんだとき、るっぺはどんなことを考えたでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 学級活動・特別活動 (学級活動、学校行事)・体育 (集団行動)
- 心のノート 「気持ちのいい一日」(1,2年用 14-17頁)

5) 読み物資料

るっぺとっしたの

「るっぺ、るっぺ、おきてるの。」

おかあさんの こえが とても とおくから きこえてきます。

さっき、目やまじどけいも とても とおくで なって いたよう
です。

「るっぺ、やっぱり おきていなかったのね。まいあさ、まいあさ、
おなじ こゝを いわせないで ちょうだい。」

こんどは、おかあさんの こえが、るっぺの かおのちかくから き
こえてきます。

でも、おさるの るっぺの 目は あきません。

「るっぺくん、早く。おくれちゃうよう。」

うさぎの ぴよんたくんは、足を バタバタさせています。

「だってえ。」

るっぺの、口は、とんがって います。

「るっぺくん、くつの かかとを ふんでるよ。ちゃんと はけよ。」

ぴよんたくんは、足を バタバタさせながら いいました。

「だってえ。」

るっぺは、口を とんがらせたまま 下を むいて くつを なおそ
うと しました。

ランドセルの 中から、いろんな ものが、みんなとびだしました。

「るっぺさん、やめて。」

クラスの みけねこちゃん、めえやぎちゃんたちは、こわい かおを
そろえて いいました。

「やだね。」

るっぺは、なにが 気に いらないのか ほっぺをふくらませたまま
すなばの すなを なげています。

「るっぺさん、いいかげんに してよ。」

みんなは、こわい かおを そろえて さげびました。

「やだね。」

といった とき たぬきの ぽんちゃんが、目をおさえて しゃ
がみこみました。

小学校 1・2年生 2学期 (よいことと、悪いことの区別をし、行動する)

「おじいさん はい お水」

1) 主題名 よいことはすすんでする 内容項目1－(3)

よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。

2) 展開の概要

- ねらい 2人がなぜ、おじいさんに水をもってきてあげようと思ったのかを考えさせることを通して、よいと思うことは、進んで行おうとする意欲を養う。

● 指導の流れ

場面1 (たばのおじいさんが、つかれた ようすで こしをおろしている)

- おじいさんはどんなようすでしたか。

場面2 (だまっておじいさんのようすを見まもる)

- 「でも…」と見まもる二人は、どんなことを考えていたでしょう。

場面3 (おじいさんに水をもってくることをけっしんする) (中心場面)

- ◎ 二人はなぜ、水をもってくることをけっしんしたのでしょ。

場面4 (おじいさんがおいしそうに水をのむ)

- おいしそうにのむおじいさんを見て、二人はどんな気持ちになったでしょう。

3) 板書例

しょうた ・ 見てうれしくなった ・ いいきもちになった おいしそうに水をのむ おじいさん	みよ ・ もってきてよかった ・ おじいさんのかおを	おら 水もってくる ・ 困っているから、たすけないと ・ おじいさんを よろこばせてあげよう ・ こまっている人をほっておいたらいけない	 しょうた 「もってきて あげようか」 「でも…」(だまって見守る) みよ ・ おじいさんはどうするんだろう ・ 知らない人だから声をかけにくいんだらう	おじいさん はい お水 つかれている のどがかわいている 水がなくてこまっている おじいさん
---	--	---	--	---

4) 他の教育活動との関連等

- 心のノート 「よいこと すすんで」(1,2年用 22-25頁)

5) 読み物資料

おじいさんはい お水

村のはずれに、とても見はらしのよいところがあります。

そこには、やわらかな草のとてがあり、たびの人がよくひとやすみしていきます。

村の子どもは、しょうたとみよは、すこしはなれた大きな木のかげから、いろんな人たちが、のんびりとやすんでいるのを見るのが大すきです。

きょうもふたりで見ていると、たびのおじいさんが、つかれたようすで、こしをおろしました。せおっていたにもつかれたけのすいとうをだしたのですが、もう、水がなくなってしまうたようすです。

「やれやれ、なんてこった。」

がっかりしたようなひとりがきこえます。

「おじいさん、お水がのみたいんだね。」

「そうよ。でもからっぽでこまっているわ。」

「お水、もってきてあげようか。」

「でも……」

ふたりは、だまっておじいさんのようすを見まわりました。おじいさんは、とてもつかれたかおで、じっとすわりこんでいます。

しょうたが、けっしんしたようにきつぱりといいました。

「おみよちゃん、おら水もってくる。」

「うん、わたしはおじいさんのことを見てるわ。」

みよもおなじ気持ちでした。しょうたはてっぽうだまみたいにいえへはしっていきました。

「おじいさん、はいお水。」

ふたりがもってきたおけの水を、たびのおじいさんは、とてもおいしそうにのみました。のこりをたけのすいとうにたっぷりといれてとてもうれしそうです。

おじいさんは、なんども手をふり、おれいをいいながらとおざかっていきました。しょうたとみよも手をふり、かおをみあわせてにっこりしました。

小学校 1・2年生 2学期 (よいことと、悪いことの区別をし、行動する)

「イタリアのアサガオ」

1) 主題名 正直に明るい心で 内容項目1ー(4)

うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。

2) 展開の概要

- ねらい たかしがどうしてお父さんに話したのかを考えさせることを通して、うそやごまかしをしないで、明るい心で生活しようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (みんなが自分のアサガオを自慢する)

- たかしはどんな気持ちで聞いていたのでしょうか。

場面2 (まり子にアサガオを見にいきたいと言われる)

- アサガオを見に行きたいと言われたとき、たかしはどんな気持ちだったでしょう。

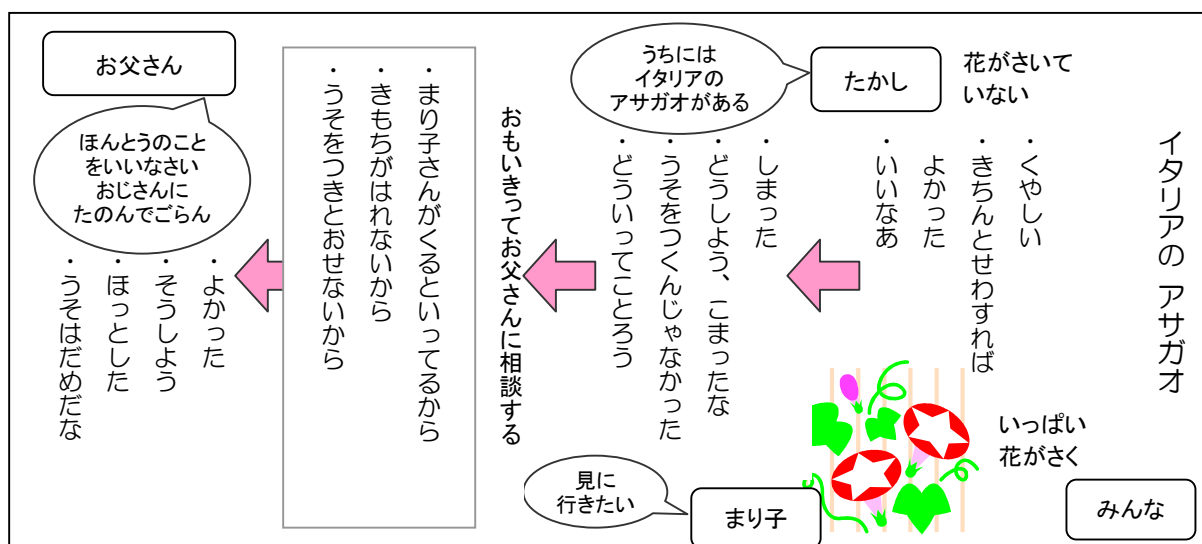
場面3 (たかしがお父さんに思いきって相談する) (中心場面)

- ◎ たかしがお父さんに、思いきって話したのはどうしてでしょう。

場面4 (お父さんから、アドバイスをうける)

- お父さんの言葉を聞いて、たかしはどんな気持ちになったでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 心のノート 「うそなんかつくものか」(1,2 年用 26-29 頁)

5) 読み物資料

イタリアのアサガオ

二學きが はじまって、みんなは げん気に とう校して きまし
た。

さっそく、先生の アサガオの うえ木ばちの まわりに あつま
っています。

「先生の アサガオ、花がたくさん さいたんだね。」

「一、二、三、四、五、六、七、はあち 八つだ。」

「わたしの あさがおは、十二 さいたわよ。」

と、まり子ちゃんが いいました。

「ぼくのは かずはすくないけど、むらさきと ピンクと 二しょく
も さいたんだよ。」

と、いさむくん。

みんな わいわいと うれしそうです。

でも、たかしの アサガオは、なつやすみに せわをしなかったの
で、二どめの 花が、まだ さいていません。

たかしは、ふと、しんせきの おじさんの いえに いった とき、

イタリアの アサガオが さいて いるのを おもいだしました。

「ぼくの うちには イタリアの アサガオがあるんだ。いろいろ

空の 青 そっくりで きれいなんだ。」

「ファー いいなあ。見にいても いいでしょ。」
と まり子ちゃんが いいました。

でも、つぎの 日から たかしは ともだちに あっても いつも
の げんきが ありません。

学ごうからの かえりみち まり子ちゃんが

「おかあさんも 見せて もらいたいんですって。」

と、いいました。

みんな、うちの 人にも はなして いるようです。

ゆうごはんの とき、たかしは、おもいきって そのことを おと
うさんにはなしました。おとうさんは、

「みんなに ほんとうの ことを いいなさい。そして、おじさんに、

イタリアの アサガオの しゃしんを おくって くださいって、で
んわで たのんでくらん。」

と、やさしく 言って くれました。

たかしは にっこりと うなずきました。

小学校 1・2年生 2学期 (みんなと仲よくする)

「 ゆっき と やっち 」

1) 主題 ともだちとなかよく 内容項目2-(3)

友達と仲よくし、助け合う。

2) 展開の概要

- ねらい ゆっきのやさしさにふれて変化したやっちの心を考えることを通して、友達と仲よくしようとする心情を育てる。

● 指導の流れ

場面1 (やっちが「ぼくのほうがはやい」とじまんするようにいう)

- やっちはゆっきにどんなことを思っていましたか。

場面2 (みんなにどんどんおいぬかれていく)

- みんなに抜かれながら、どんなことをやっちは考えていましたか。

場面3 (しんばいするゆっきに「ぼくのことは いいから、先にいけよ」という)

- このときやっちは、どんな気持ちだったのでしょうか。

場面4 (「ありがとう ゆっき」という。)(中心場面)

- はずかしそうに言ったとき、どんなことをやっちは考えていましたか。

3) 板書例

Board book example showing the story of Yuki and Yachi. The board is divided into sections with text and illustrations of the bees.

- Section 1 (Left):**
 - ありがとう (Thank you)
 - ゆっきは やさしいな (Yuki is so nice)
 - じまんして わるかったな (I was ashamed of my boasting)
 - ゆっきのことをだいせつにしよう (Let's be nice to Yuki)
- Section 2 (Middle-Left):**
 - さきに いけよ (Go ahead)
 - だいじょうぶ (It's okay)
 - いっしょに (Together)
 - いっしょに (Together)
- Section 3 (Middle-Right):**
 - みんなにぬかれる (Being outdone by everyone)
 - ・くやしい (I'm annoyed)
 - ・もうやめたいな (I want to stop)
 - ・ほんとうは ぼくのほうが はやいの (Actually, I'm faster)
 - ・じまんしてたのに はずかしい (I was boasting and it's embarrassing)
 - ・やっちも まけてしまふ (Yachi will also be defeated)
- Section 4 (Right):**
 - ゆっき (Yuki)
 - ぼくのほうが はやいさ (I'm faster)
 - ・ゆっきにはぜったいかてる (I will definitely beat Yuki)
 - ・ぜったいに いちばんに なる (I will definitely become the best)
 - やっち (Yachi)

4) 他の教育活動との関連等

- 心のノート 「友だちと いっしょ」(1,2 年用 44-47 頁)

5) 読み物資料

ゆっきとやっち

お日さまが あたたくて、とても 気持ちのよい はるの日の
ことでした。

みつばちの ゆっきと やっちは みんなと いっしょに、すみれ
のお花ばただけ たのしそうに あそんでいます。

そのうちに、だれが はやく とべるか、くらべっこを すること
になりました。ずっと むこうに見える一本すきを、まわって
く

ゆっきは、となりに いた やっちに いいました。

「やっちは はやく とべるから いいね。」

「そうさ、ぼくは だれにも まけないさ。」

「ぼくも がんばるよ。」

「ゆっきが いくら がんばったって、 ぼくのほうが はやくさ。」
やっちは、じまんするやうに いいました。

よついでん。みんな いきおいよく とび出しました。やっちは、
先とうを ぐんぐん とんでいます。ゆっきは、すこし おくれまし
た。

すぎの木を まわったころ、どうしたことが やっちの スピード

が きゅうに おちてきました。みんなが つぎつぎに やっちを
おいぬいていきます。とうとう ゆっきにも おいつかれて しま
いました。

「やっち どうしたの。」

ゆっきは、おもわず こえを かけました。

「ちょっと おなかが いたいんだ。はじめに がんばりすぎたのか
な。」

「だいじょうぶ？ くるいのかい？」

「ぼくのことはいいから、先に いけよ。」

やっちは、くるしそうな かおをして いいました。

ゆっきは まよって しまいました。

「やっち、いっしょに いこうよ。さあ、ぼくの手につかまって。」

「そんなことを したら、ゆっきが おくれるよ。」

「いいんだよ。」

「ありがとう ゆっき。」

やっちは、はすかしそうに いいました。ゆっきと やっちは、なら
んで とんで いきました。

二人の ほほに あたる かぜは、とても さわやかでした。

小学校 1・2年生 2学期 (みんなと仲よくする)

「ぐみの木と小鳥」

1) 主題 あたたかい心 内容項目2-(2)

幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。

2) 展開の概要

- ねらい 嵐の日にぐみの実を運んだ小鳥の気持ちを考えることを通して、相手の気持ちを考え、進んで親切にしようとする心情を育てる。

● 指導の流れ

場面1 (ぐみの木が小鳥に、友だちのりすさんがすがたを見せないことを言う)

- 小鳥は、りすさんのことを聞いて、どう思ったでしょう。

場面2 (りすさんが「おかげでだいぶよかった」という)

- 「だいぶよかった」と聞いたとき、小鳥はどんな気持ちだったでしょう。

場面3 (あらしの音を聞きながらじっと考える)(中心場面)

- ◎ 嵐の音を聞きながら、小鳥はどんなことを考えていたでしょう。

場面4 (りすさんからお礼を言われる)

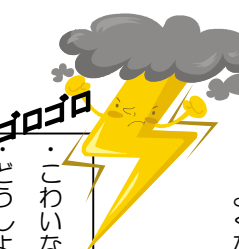
- りすさんにお礼を言われたとき、小鳥はどんな気持ちになったでしょう。

3) 板書例

・げんきになって よかったね
・あめだったけど いってよかった
・ぐみの木も よろこぶね

ありがとう





・こわいな きょうはやめよう
・どうしよう
・がまってるからいけないと

・りすさんがげんきになってよかった
・ぐみの木もよろこぶかな
・もっと もっとこよう
・よくなるまで つづけよう



・りすさんはいじょうぶかな
・いってあげようかな

ぐみの木と小鳥

4) 他の教育活動との関連等

- 生活科、特別活動(学校行事)
- 心のノート 「あたたかい 心を とどけよう」(1,2年用 40-43頁)

5) 読み物資料

ぐみの木と小鳥

山の上にぐみの木が立っていました。秋がふかまるにつれて、ぐみのみは、いっそう赤くなっていきました。

ある日のこと、一羽の小鳥がやって来て、ぐみの木にとまっていました。

「ぐみの木さん、ぼく、おなかですいてこまっています。」

「それはお気のどくに。わたしのみでよかったら、どうぞおあがりください。」

小鳥は、木のえだになっっているみをくちばしでついばんで、おいそうに食べました。

ぐみの木は、その小鳥のようすを見ているうちに、友だちのりすのことを思い出して、心ばいような顔をしました。

「どうかしましたか、ぐみの木さん。」

ぐみの木は、しばらくだまっていましたが、小鳥が何ともたずねるのでいきました。

「じつは、あの山かげに、私の友だちのりすさんがすんでいるのですが、このごろ少しもすがたを見せないのです。」

「そうでしたか。それでは、ぼくがりすさんのようすを見に行つて来てあげましよう。」

「小鳥さん、ありがとう。ついでに、このぐみのみもとけていただけないでしよつか。」

小鳥は、ぐみのみをいくつかくちばしにくわえると、とび立ちました。

小鳥が山かげに来てみると、りすは、びょう気でねていました。小鳥は、りすのまくらもとに、赤いぐみのみをおいて、いいました。

「これは、あなたとなかよしのぐみの木さんにたのまれて、もつて来ました。ぐみの木さんは、あなたのことを心ばいしていましたよ。」

「小鳥さん、ありがとう。ぐみの木さんによろしくね。」

りすは、ぐみの、みを食べてみました。すると、何ともいえないよいあじが、口の中にひろがっていき、少し力が出てきたように思われました。

つぎの日も、小鳥は、ぐみのみをくわえて、りすのとこへ入とんで行き

ました。

「からだのぐあいはどうですか。」

りすは、なみだを目にいっぱいかけて、いいました。

「おかげで、だいぶよくなりました。」

しばらくして、小鳥は、

「りすさん、では、またあしたね。」

という、とび立って行きました。

つぎの日、小鳥は、あらしの音で目をさしました。ぐみの木はいいました。

「小鳥さん、きょうは、あらしですよ。だから、りすさんのところへ行くのは、あらしがやんでからにしてくださいね。」

小鳥は、しばらくまちました。しかし、いつまでまっても、あらしはやみそうにありません。小鳥は、あらしの音を聞きながら、じっと考えていましたが、やがて、ぐみのみをいくつもくわえると、とび立って行きました。

ぐみの木は、

「小鳥さん、気をつけて。」

とさけびました。小鳥のすがたは、だんだん小さくなっていきます。はげしい雨と風が小鳥のはねにあたって、今にも地めんたたきつけられそうです。しかし、小鳥は力をふりしぼってとびつけました。やっこの思いで、りすのとこにたどりつく、りすは、

「こんなあらしの中を、よく来てくださいました。小鳥さん、ありがとう。もうすぐ、ぐみの木さんにあえるでしょう。」

といいました。そのばん、小鳥は、りすの家にとまりました。

朝になると、あらしもやんで、空が青くすんでいました。小鳥は、ぐみの木のところへいそぎました。ぐみの木は、話を聞くと、

「りすさん、もうだいじょうぶでしょう。ごしんせつは、いつまでもわすれません。」

といいました。やがて、小鳥は、ぐみの木にわかれをつげて、とびさらました。

小学校 1・2年生 3学期 (約束やきまりを守る)

「あぶら山」

1) 主題 きまりを守る 内容項目4ー(1)

約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。

2) 展開の概要

- ねらい あぶらがでなくなったときに村人たちが気づいたことを考えることを通して、きまりを守り、みんなで使う物を大切にしようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (村人は手をあわせ、ひとばんぶんのあぶらだけをくんでかえていた)

- なぜ手をあわせて、たいせつにくんでかえていたのでしょうか。

場面2 (なべいっぱいにあぶらをくんできたのをとなりのじいさまに見つかる)

- じいさまに言い返した一平は、どんなことを考えていたでしょう。

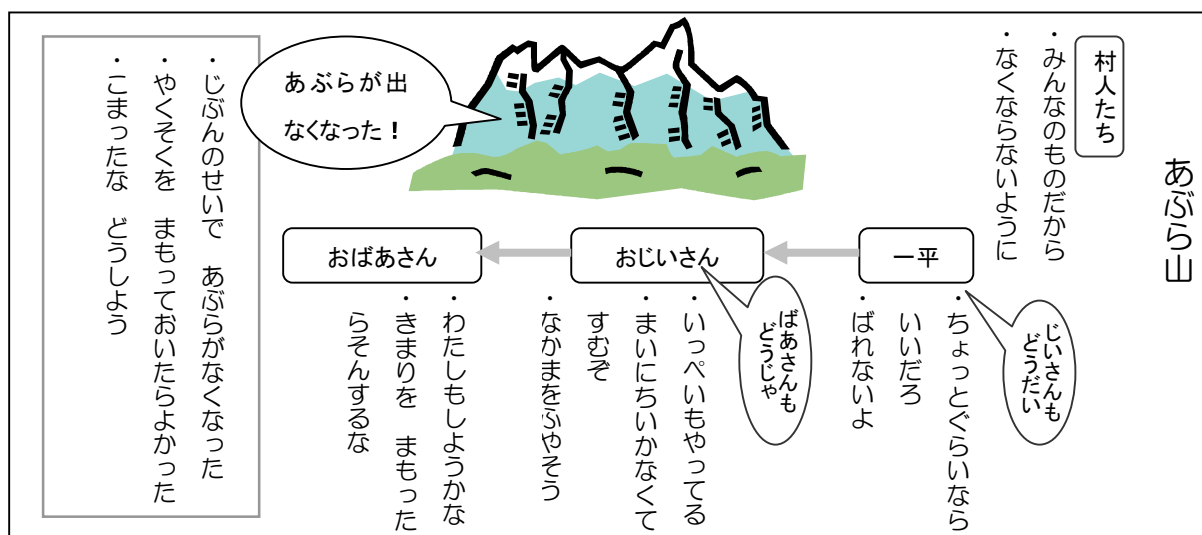
場面3 (じいさまがとなりのばあさまに見つかる)

- じいさまは、なぜ、ばあさまにもすすめたのでしょうか。

場面4 (1てきのあぶらも出なくなり、村がさびれる) (中心場面)

- ◎ あぶらがでなくなったとき、一平はどんなことに気づいたでしょう

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 生活化・社会科 (公共施設の学習、利用)・特別活動 (学級活動、学校行事)
- 心のノート 「みんなで楽しく 気もちよく」(1,2 年用 72-75 頁)

5) 読み物資料

あぶら山

でんとうの あかりも なかった むかしの こと。あぶら山と
いう、小さな 山のいわかけから、ちろちろと あぶらが ながれ出
て、くぼみに たまっていたと。

おかげで 村人は、あぶらを さらに いれ、しんに 火を と
して、よる おそくまで しごとが できた。

「あぶら山さまさま。」

と、村人は 手を あわせ、その日 ひとばんぶんの あぶらだけを、
あぶらぎらに たいせつに くんで かえたのだ。

こんこんと ゆきが ふりつもる 日、一平と いう わかものが、
とうさまに あぶらぐみを たのまれた。一平は、口を とがらせて、

「い、く、よ、い、く、よ、でも、こんな さむい 日に、まいばんなんて い
やだ。なん日ぶんも、いっぺんに くめば いいのに。」

「それは いかん。あの あぶらは、どの いえでも その ばん
つかうぶんしか くんで こない やくせんになって いるのじ
ゃ。」

とうさまに しかられて、あぶら山に やって きた一平は、だ
れも いらないのを さいわい、なべ いっぱいに あぶらを くんで、
うらの たけやぶに そっと かくした。そして へろろと した
を出して、

「おれは なんて かしいんだろう。」

ところが ある タがた、一平が なべ いっぱいに あぶらを
くんで きた ところを、となりの じいさまに 見つかって しも

うた。

「や、や、一平！ そんなに あぶらを くんで、あぶら山の あぶ
らがなくなったら、どうするー！」

「なくなるものか。ために じいさまも、大きな なべに くんで
みたら どうだい。」

へらへら わらって、一平が いってしまった あと、となりの じ
いさまは 考えた。

(ふむ。一平の いうのも もっともじゃな。)

そこで、じいさまが こそこそと、なべに あぶらをくんで かえ
って きたら、なんと、その また となりの ばあさまに 見
かけて しもうた。

じいさまは あわてて、

「い、いや、一平も くんで おってな。しかし、あぶらは なくな
らん。ばあさまも どうじゃ。」

ばあさまは、目を まるくしたが ひびくこと。

(一平も、となりの じいさまも やってる こと。わたしも ひと
つ 大きな なべで……。)

こうなると もう 村の みんなが、なべを かかえて くみはじ
めた。

こうして しばらく たつと、あぶら山からは、一てきの あぶ
らも 出なく なり、村は すっかり さびしく なって しもうた
と。

小学校 1・2年生 3学期 (約束やきまりを守る)

「おゆうぎかい」

1) 主題 しっかりやろう 内容項目4ー(1)

約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。

2) 展開の概要

- ねらい まわりの様子を見て、うさ子が考えたことを通して、マナーを守ることの大切さに気づき、進んで守ろうとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (おかあさんといっしょに森のひろばへいそいで行く)

- うさ子はどんなことを考えながら森の広場へむかったのでしょうか。

場面2 (1時になり、おゆうぎかいがはじまるのをまつ)

- 出番を待つりすさんたちを見て、うさ子はどんな気持ちになったでしょう。

場面3 (さるくんたちがおいかけっこをし、おゆうぎかいがなかなかはじまらない)

- うさ子は、さるくんたちのことをどう思っていたでしょう。

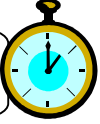
場面4 (おゆうぎ会がはじまって、なぜこうなのかをうさ子が考えはじめる) (中心場面)

- ◎ おゆうぎかいが始まったとき、うさ子はどんなことを考えていたのでしょうか。

3) 板書例

静かにしてください

・なんでもいうことをきかないのかな
・ちゃんと ちゅういしないと
・めいわくをかけたらだめだよ



・はやく すわってよ
・いつになったら しずかにするの
・ちがうところであそんでよ

発表会

ザワザワ ザワザワ

・りすさん がんばれ
・じょうずにできるかな
・だいじょうぶかな
・まちがわないでできるかな

ザワザワ

バタバタ



おゆうぎかい



4) 他の教育活動との関連等

- 各教科・特別活動(学級活動、学校行事)
- 心のノート 「みんなで楽しく 気持ちよく」(1,2 年用 72-75 頁)

5) 読み物資料

おゆづきかい

「たぬきちくんや みみ子ちゃんも できるよ。」

「そう、それは たのしみね。」

うさ子は、うきうきしながら おかあさんと いっしょに 森のひろばへ いそいでいきます。きょうは、一じから どうぶつ村のおゆづきかいが はじまるのです。

ひろばに つくと、もう まんいんです。みんな たのしそうには なしあっている、とても にぎやかです。うさ子は、おかあさんと 一緒にいる ところを 見つけて すわりました。

「はんに おゆづきをする りすさんたちが、まくのうしろで まって います。」

「一じに になりました。」

「しずかに してくださる」
かいじょうがかりの くまさんが いいました。でも しずかに ありません。

「ぼくの おとうとが、おゆづき」 できるんだよ。」

「わたしの いもうとは 三ばんめよ。」

「うさぎさんたちの ダンスがたのしみね。」

と、いろいろなおしゃべりが きこえてきます。

「もう、やめなさい。」

うさ子の あかあさんは、となりの たぬきちくんたちに ちゅういをしました。

「しずかに してくださる。」

くまさんは、もういちど 大きなこえで いいました。

でも さるくんたちは へい気なかおで おいかけっこを しています。

「ねえ、早く すわってよ。」

うさ子は たまらなくなっている、いいました。

「わかったよ。でも うるさいのは ぼくたちだけじゃないよ。」
さるくんたちは、いいかえます。

ようやく、すこし しずかになったので、まぐが あきました。

でも、おかしのふくろを ガサガサせたり、ポリッ、ポリッと おかしを たべながら、おしゃべりする こえが きこえてきます。

「なぜ、こうなのかしら。」

うさ子は、かんがえはじめました。

小学校 3・4年生 1学期 (よく考えて行動する)

「 トムトムが見たものは 」

1) 主題名 素直な心で 内容項目1ー(4)

過ちは素直に改め、正直に、明るいいで元気に生活する。

2) 展開の概要

- ねらい トムトムがジムおじさんのようすをじっと見つめながら考えたことを通して、過ちを素直に改めようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (おかあさんにジムおじさんにたのんでほしいと言う)

- 「すぐにたのんでよ」と言ったトムトムはどんなことを考えていたでしょう。

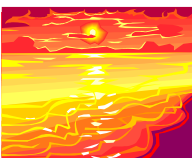
場面2 (お母さんはだまってへやを出て行く)

- お母さんを待っているあいだ、トムトムはどんなことを考えていたでしょう。

場面3 (遠めがねでおじさんのようすをじっと見つづける)

- 大すきなおじさんの苦しそうな顔を見たとき、トムトムはどう思ったでしょう。
- ◎ トムトムの目にうかんだなみだは、どんななみだだったのでしょうか。

3) 板書例



・むりをいってごめんなさい
・あんなことを言わなければよかった
・わがままをきいてくれてありがとう

・もっと食べたいって
言わなければよかった。
・もうとらなくていいよ。
・だいじょうぶかな

あっ、おじさんだ

・楽しいたんじょう日にしたいな
・たんじょう日だから
ほくの言うことを聞いてほしいな

・どこへいったん？
・せっかくのたんじょう日なのに
・おもしろくない

トムトムが見たものは

たんじょう日プレゼント



お母さんだまって出て行く

4) 他の教育活動との関連等

- 心のノート 「自分に正直になれば、心はとても軽くなる」(3,4 年用 24-27 頁)

5) 読み物資料

トムトムが見たものは

きょうは、南の島のトムトムのおたん生日です。みんな楽しそうに、おいわいのお昼の「ちそう」を食べています。

「こんなおいしい貝を食べたのは、はじめてだ。もっと食べたいなあ。」
 「もう、これだけしかないのよ。これはジムおじさんからのプレゼントなの。海のそこぶかくにすむ、めったにとれないめずらしい貝なのよ。」

「それなら、よけいに食べたいなあ。たのんですよ。」

「いけません。そんなむりなことを。」

「ジムおじさんならきくと聞いてくれるよ。ねえ、ねえ、すぐにたのんですよ。」

「……………」

トムがあまりにも強く言うので、お母さんはだまってへやを出て行きました。

トムトムは、いつもお母さんがもどってくるかと、気にしながら食事をしていました。しかし、なかなかもどってきません。

（いったい、何をしてるんだ。おそいなあ、お母さんは……………）

トムトムは、「ちそうさま」も言わないで、自分のへやへもどって行きました。

夕方近くになって、トムトムはヤシの木にのぼり、つつのようなもので、あたりをながめていました。それは、おたん生日のおいわいに、となりの島のおばさんからいただいたばかりの遠めがねだったのです。

（これはすごい。遠くの島がこんなに近くに見える。）

（ワァー、遠くの船も、目の前を走っているようだ。）

トムトムはうれしくなって、つつをのぼしたり、ちぎめたりしながら、あちらこちらをながめていました。

（おやっ、あれは……………）

トムトムは、動かしていた手をとめ、何かをじっと見つめています。

（小ぶねから、海にとびこんでいる人がいる。）

（いったい、何をしているんだろう。）

ふしぎに思ったトムトムは、遠めがねのつつをまわして、もっと近くを見えるようにしました。

（あっ、ジムおじさんだー！）

なんと、そこに見えたのは、トムトムの大すきなジムおじさんの顔でした。しかし、いつもとちがって、とても苦しそうです。ハアハアとはく息の音が、つたわってくるようです。

（もしかしたら……………）

トムトムは、まっかな夕日をつけて何度も何度も海にとびこむジムおじさんのようすを、じっと見つづけました。そのうちに、トムトムの目になみだがかんできました。

トムトムは、何かを思いついたように、するすると木をおりると、家にとびこんで行きました。そして、お母さんの顔を見るなり、

「お母さん、お昼のときはごめんなさい。あんなにおいしい貝を食べることができて、とてもうれしかったよ。それなのにぼく……………ジムおじさんにおやまってくるよ。」

と、言って、また、急いで外へとび出して行きました。

小学校 3・4年生 1学期 (よく考えて行動する)

「なしの実」

1) 主題名 正直に明るい心で 内容項目1ー(4)

過ちは素直に改め、正直に、明るい心で元気よく生活する。

2) 展開の概要

- ねらい お父さんにあやまったときのアンリの思いを考えるを通して、正直に明るい心で元気よく生活しようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (なしの実をいっぱい取る)

- アンリが、なんとなくすっきりしなかったのは、どうしてでしょう。

場面2 (お父さんに聞かれてはっとして、うつむく)

- うつむいてしまったアンリは、どんなことを考えていたでしょう。

場面3 (お父さんに正直に話す)

- どんなことを思って、お父さんに正直に話し出したのでしょうか。

場面4 (お父さんのむねにとびこむ) (中心場面)

- ◎ アンリはこの日のどんなことを一生わすれることができなかったのでしょうか。

3) 板書例

アンリ

ごめんなさい
ぼく、...

正直に話をする

- ・ お父さんに悪いから
- ・ このままだと気持ちがすっきりしない
- ・ お父さんをうらぎりたくない

お父さん

いったい
どうしたんだ

「はっとしてうつむく」

- ・ とらなかつたらよかった
- ・ 何て言おう
- ・ 言ったら弟もしられる



なしの実

- ・ 見つからないか心配
- ・ おこられないか不安

とってよ

おなかをすかした弟

4) 他の教育活動との関連等

- 心のノート 「自分に正直になれば、心はとても軽くなる」(3,4 年用 24-27 頁)

5) 読み物資料

なしの実

フランスの小さな村の農家に生まれたアンリは、毎日、弟のフレデリックとなかよく遊んでいました。アンリの家はまずしく、すきなものを買ってもらえるゆとりはありませんでした。

そんなある日のことです。アンリが学校から帰ってくると、フレデリックがまちかまえており、家のうらに引っぱっていかれました。そこには、太くて大きな木が一本高くそびえています。そして、少しひくいところになり、家のなしの木の実だかのびてきていました。そのえだには、今にもおれそうなほど、たくさん、なしの実がついています。

「ねえ、とつてよ。ぼく、おなががすいているんだ。」

フレデリックは、アンリにせがみました。

アンリは、こまった顔でフレデリックの方を見ました。

「お兄ちゃん、あんなにたくさんついているんだから、少しづらいつても、わからないよ。」

フレデリックは、もう、とりたてしかたがありません。

「でも、見つかったらどうするんだ。」

「お兄ちゃん、だいじょうだよ。だれも見えないもん。」

弟にせがまれてアンリはだれもいないことをたしかめると、目の前の大きな木に登りはじめました。太い横えだのところにくると立ち上がり、えだ先の方へ、おそろおそろ進みました。

しかし、いくらこしをかがめても、なしの木までは手がとどきません。すると、

「お兄ちゃん、これでとつたら。」

と、フレデリックが、虫あみをもってきました。

アンリはそれで一つ、二つとなしの実をとつては、下にいるフレデリックに落しました。フレデリックは大よろこびです。しばらくすると、なしの実はいっぱいとれていました。でも、アンリは、何となくすっきりしませんでした。

その夜のことです。夕食を終えたアンリは、なしをとったことが見つからないかと気にしながら、へやで本をよんでいました。すると、台所からお父さんのよぶ声が聞こえてきます。

行ってみると、お父さんは、こわい顔をしてすわっていました。

「アンリ、いま、お母さんから聞いたんだが、うらの『ミ』すて場になしの食べかすがいくつもころがっていたそうだ。いったいどうしたんだ。」

アンリは、はっとしたまま、うつむいてしまいました。

「なぜ、だまっているんだ。」

アンリは、ただうつむくだけでした。

しばらくすると、アンリをじっと見ていたお父さんは、

「アンリ、お父さんやお母さんは、おまえたちがいつも明るくすなおな気持ちでいてくれるようにいっているんだよ。私たちにとって、おまえたちは自まんのむすこなんだ。家がまずしいことは、本当にすまないと思っている。しかし、だからこそ明るくどつどつと生きてほしいんだ。」と、ゆっくりさとすように話しはじめました。

アンリの目には、うつすらとなみだがうかんできました。そして、お父さんの話がまだ終わらないうちに、

「お父さん、ごめんなさい。ぼく、となりの家の……」

と、体をふるわせながら言いだしました。それをじっと聞いていたお父さんは、いすから立ち上がり、

「アンリ、よく言ってくれたね。お父さんはうれしいよ。あした、フレデリックといっしょに、おとなりの家にあやまりに行こう。」

と言って、アンリのかたにやさしく手をのせました。アンリは、こうえきれなくなり、お父さんのむねにとびこんでいきました。

アンリは、この日のことを一生わすれることができませんでした。

小学校 3・4年生 1学期 (よく考えて行動する)

「まどガラスとさかな」

1) 主題名 正直に明るい心で 内容項目1ー(4)

過ちは素直に改め、正直に、明るい心で元気よく生活する。

2) 展開の概要

- ねらい 千一郎がなぜお母さんにガラスを割ったことを話したのかを考えることを通して、正直に明るい心で生活しようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (ガラスを割り、夢中で逃げる)

- ガラスを割って夢中で逃げているとき、千一郎はどんな気持ちだったでしょう。

場面2 (学校へ行く途中、遠回りしてその家の前を通る)

- 何度もガラスを見に行ったときの千一郎はどんな気持ちだったでしょう。

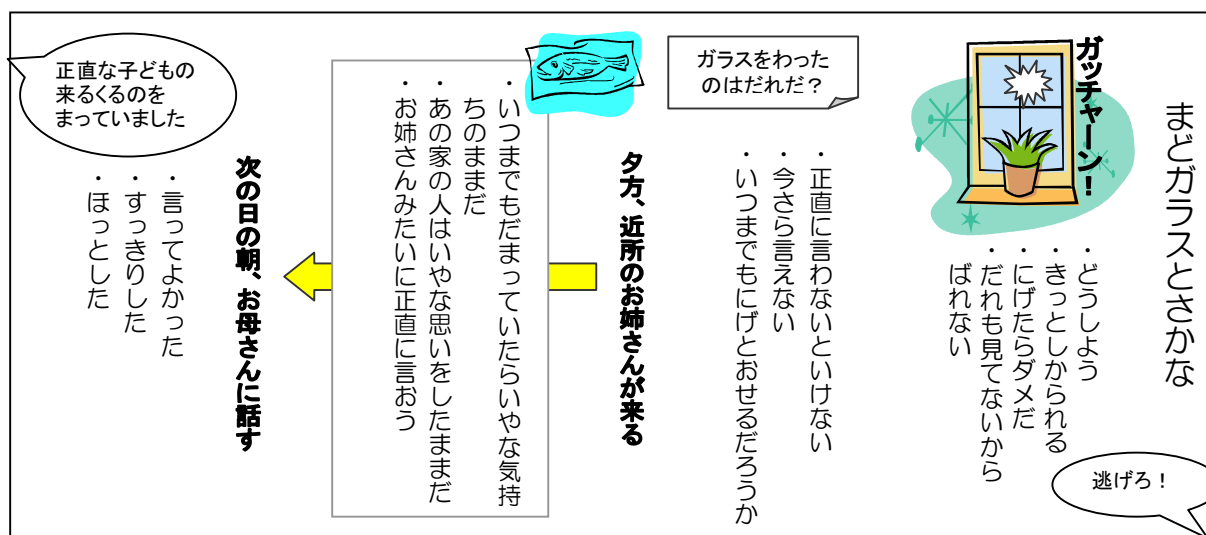
場面3 (お姉さんがあやまりにきた次の日の朝、お母さんに話す) (中心場面)

- ◎ お姉さんがあやまりにきた夜、千一郎はどんなことを考えたでしょう。

場面4 (おじいさんにゆるしてもらおう)

- おじいさんにボールを返してもらったとき、千一郎はどんな気持ちだったでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 心のノート 「自分に正直になれば、心はとても軽くなる」(3,4 年用 24-27 頁)

5) 読み物資料

まどガラスとさかな

ガチャン！

ガラスのわれる音がしました。

「だれだっ。」

と言われないうちに、

「にげろ」

と、文助がかけだしたので、千一郎もむちゅうでかけました。かけながら、頭の中では、

「にげちゃいけない。あやまらなきゃいけない。」と思いながら、足のほうはどんどん先に走りまわりました。

今にも後ろから、大きな手で、ぐいとえりくびをつかまえられそうな気がして。

千一郎の投げたボールが、思いがけなく高くとんでいきました。文助はとびあがりましたが、てんで、とどきません。

「しまった。」

と思うまもなく、ガチャンときました。

遠くまでにげのびると、文助は千一郎の顔を見て、

「よかったね。」

というように、にやりとしました。が、千一郎はわらいませんでした。かおをまっかにして、いきをはずませていました。

次の日——朝、学校へ行くとき、千一郎は遠まわりをして、こっそりとおってみました。

その家のまどガラスは、一まいだけぼかんとあながあいていました。

はっとして、千一郎は目をそらしました。自分のからだにも、ぼかんとあながあいたように思われました。そこからさむぎむとした風がとおりぬけていきました。

気になって、学校の帰りにも、とおってみました。今度は、白いかみがはってありました。かみいっぱいに、すみでくろくろく、

「ガラスを わったのは だれだ？」と、書いてあります。

「ぼくです。」

と、口の中でさけびながら、千一郎は、あわててかけだしました。

次の日は雨でした。風も吹いていました。

やっぱり気になって、千一郎は学校の帰りに、また遠まわりをしてみました。

まどは、きのうのままです。雨がふきつけて、白いかみがぬれていました。もうすぐにやぶれてしまつてしょう。

「ガラスを わったのは だれだ？」

という、太い字が、千一郎をにらみつけました。

千一郎は自分の体がぬれて、やぶれて、とんでいくような気がしました。心がしめって、おもくなりました。

その日の夕方です。

雨ががって、きれいな夕やけが、ぬれたやねがわらをあかくそめていました。

千一郎はつくえにむかって、算数の宿題をやっていました。すると台所でおかあさんがいきなり、

「あらっ。」

とさけびました。

「まあ、にくらしいこと。どこかのねこが、おかあなをさらっていったわ。」千一郎もおどろいて台所へいきました。おかあさんがくやしそうに外をのぞいていました。

「どこか、すずすずしいね。ちょっと目をはなしたときに、一ぴきさらっていったのよ。これから、やこつと思つたら——」

物音が気がついてふりかえる、ねこはもつとうしろをまがる、こころでした。

千一郎の好きなあじのひものを二ぴきそろえてお皿の上においたので、す。まん中の一ぴきをとられてしまいいました。

今夜のおさいが、一人前たりなくなりました。けれど、おかあさん

は買いに行きません。

「しかたがないわ。おかあさんが、がまんしましょう。」

「いいよ。おかあさん。ほくと半分ずつ食べれば——。」

千一郎は、

「どこのねこだらう。今度見つけたら、ひどい目にあわせてやろう。」
と思いました。

二ひきのさかなを三人で食べて夕はんがすみしました。

「こんばんは……。ごめんください。」

「はい。」

おかあさんが出てみると、お客は近所の山田さんのおねえさんでした。

「あのう、おたくでもしや、ねこにおさかなをとられませんでしたか。」

「ええ、さつき、とられましたけど。」

「あら、おたくでしたの。ほんとにもうしわけありません。うちのねこがさかなをくわえてきて、ぬれえんで食べているのを見つけました。おどろいて、一けん、一けん、聞いてまわりました。」

おかあさんは、いらないと言いましたが、おねえさんは大きなあじのひものを二まいおいて帰りました。

「かんしんなおじょうさんねえ。」

と、おかあさんはおとうさんに話しました。

次の日は、日曜でした。

あさ、おきると、まっさきに千一郎は、

「おかあさん。ほく、よそのうちのガラスをわったよ。」
と、わけを話しました。

「まあ、どうしてその日のうちに言わなかったの。」

おかあさんは、千一郎とガラス屋をつれて、その家へおわびに行きました。まどには、もう新しいガラスがはまっていました。

おかあさんは、ガラスのお金をさしでしたが、その家のおじいさんは手をふりました。

「いや、ガラス代なんかありませんよ。私はただ、正直な子どものくるのを、たのしみにまっています。」

そういつて、千一郎のボールを返してくれました。

出典 文部省 小学校道德の指導資料



小学校 3・4年生 2学期 (進んではたらく)

「小さなげき場」

1) 主題名 みんなの役に立つ 内容項目4ー(2)

働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。

2) 展開の概要

- ねらい おじさんとおばあさんのひときわ大きな拍手を聞いたときの主人公たちの喜びを通して、公共のために役に立とうとする心情を育てる。

● 指導の流れ

場面1 (自分たちも指人形ができないか、おじさんにたのんだ)

- 「お願いしますか。」と言われたとき、二人はどう思いましたか。

場面2 (いろいろあやつってみたが、なかなかうまくいかない)

- うでがいたくなってきたとき、由香はどんなことを考えたでしょう。

場面3 (おばさんからずいぶんうまくなったじゃないと言われる)

- おばさんの話を聞いて、由香はどんなことを考えたでしょう。

場面4 (カーテンがしまり、おじさんとおばさんからも拍手を受ける)

- ◎ 大きな拍手を受けたとき、二人はどんな気持ちになったでしょう。

3) 板書例

大きな拍手

- ・子どもたちによろこんでもらえてよかった
- ・おじさんやおばさんのおかげでうまくいった
- ・さいごまでがんばってよかった



うまくなったよ

最後までがんばろう

うまくなってきたよ

うまくなってきたよ

うけんめい教えてくれているからがんばろう

もうだめ!

こんなにもずかしいとは…

わたしにはむりかな

おじさんやおばさんにめいわくかもしれない

小さなげき場

よしがんばるぞ

やった 子どもたちによろこんでもらえるようがんばろう

お願いするか

4) 他の教育活動との関連等

- 社会科・当番活動・係活動
- 心のノート 「みんなのために流すあせはとても美しい」(3,4年用 76-79頁)

5) 読み物資料

小さなげき場

おじさんの家は、毎週一回、小さなげき場になります。茶の間にかわいい手作りのいすをならべた、指人形のげき場です。

おじさんは、タクシーの運転手をしています。子どもが大すきで、休みの日には、近所の子どもたちをしょうたいしてくれるのです。

午後三時、みんなが、かわいいいすにすわると、赤い小さなカーテンが開きます。おじさんとおばさんは、いろいろな指人形をすばやく取りかえて、げきを進めていきます。

おじさんは、本当にうまいのです。グリム童話やアンデルセン童話、昔話や、よく知っているお話でも、指人形が動いたり、話したりするのを見ていると、ずっずつと楽しくなります。

おじさんの指人形は、しだいにみんなに知れわたっていきました。

「うちの幼稚園の子どもたちに見せていただけませんか。」

「市の図書館祭りに来てくださいませんか。」

あちこちから、たのまれるようになりました。家のげき場もつづきたいし、幼稚園や図書館の子どもたちに見てもらいたいし、おじさんとおばさんは、こまっつてしまいました。

子どもたちの中に、真理子と由香という女の子がいました。集まってくる子どもたちの中では年が上で、いつも、げきの準備や後かたづけを手つだっていました。

おじさんたちがこまっつていることを知った二人は、自分たちで指人形ができないかと、思いきっておじさんにたのんでみました。おじさんは、ちよつと考えていましたが、

「人形を使えるようになるまで、けっこうたいへんなんだよ。」

「でも、やってみます。みんなが楽しみにしてるんですもの。」

「うれしい話だけど、真理子さんも由香さんも学校があるしね…。」

「おじさんの指人形を、たくさんの子どもたちが見たがっています。わたしたち、やれるだけやってみます。」

「うーん…。じゃ、お願いするか。そうすれば、わたしたちももっと、がんばることができるようだね。」

おじさんはうれしそうに、「赤ずきんちゃん」の指人形を出してきました。二人は人形に指を入れ、教えてもらいながら、いろいろとあやつつてみましたが、なかなかうまくできません。

「由香さん、赤ずきんちゃんの首がたれてるよ。指を立てて!」

「真理子さんの頭がまる見えだ! こしをひくくして!」

二人の指と右うではいたくなり、首やこしまでこつてきました。これではまるで、赤ずきんちゃんのおばさんです。そのうえ、せりふもおぼえなくてはなりません。

「ああ、もうだめ! わたし、オのうがないのよ。」

由香が大げさな悲鳴をあげたので、おばさんはわらいだしました。

「由香さん、ずいぶんうまくなったじゃない。もう一息よ。おじさんだって、はじめから上手にできたわけじゃないの。おじさんは、今でも毎日、練習してるのよ。二人のこんどの出しものは、やさしい『吉四六さん』にしましょうか。」

由香の読むお話に合わせて、真理子が指人形をあやつるのです。

これならできそうでした。おばさんに見てもらって、二人は熱心に練習を続けました。次の土曜日、いよいよ二人の『吉四六さんのとんち話』のカーテンが開きました。

かわいいはく手が起こって、由香が話し始めると、真理子の吉四六さんの指人形は、おどけて走ったり、転んだり。見物の子どもたちはもう大よろこびです。

カーテンがしまると、子どもたちのはく手にまじって、ひときわ大きなはく手がありました。おじさんとおばさんです。

「せいこうよ! せいこうしたのよ!」

真理子と由香は、おじさんとおばさんのあたたかいはく手を聞きながら、ほおを赤くそめて手を取り合いました。

小学校 3・4年生 2学期 (進んではたらく)

「神戸のふっこうはぼくらの手で」

1) 主題名 みんなの役に立つ 内容項目4ー(2)

働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。

2) 展開の概要

- ねらい 避難生活の中で主人公のぼくが気づいたことを考えることを通して、力を合わせて仕事をする大切さを理解し、みんなのために進んで働こうとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (おとなの人たちがひなん所の仕事を分たんすることになる)

- 先生の姿や、次々と手伝いだす大人を見て、「ぼく」はどう思ったでしょう。

場面2 (小さい女の子が牛にゅうびんを温めて配っている)

- 女の子から牛にゅうびんをもらったとき、どんな気持ちになったでしょう。

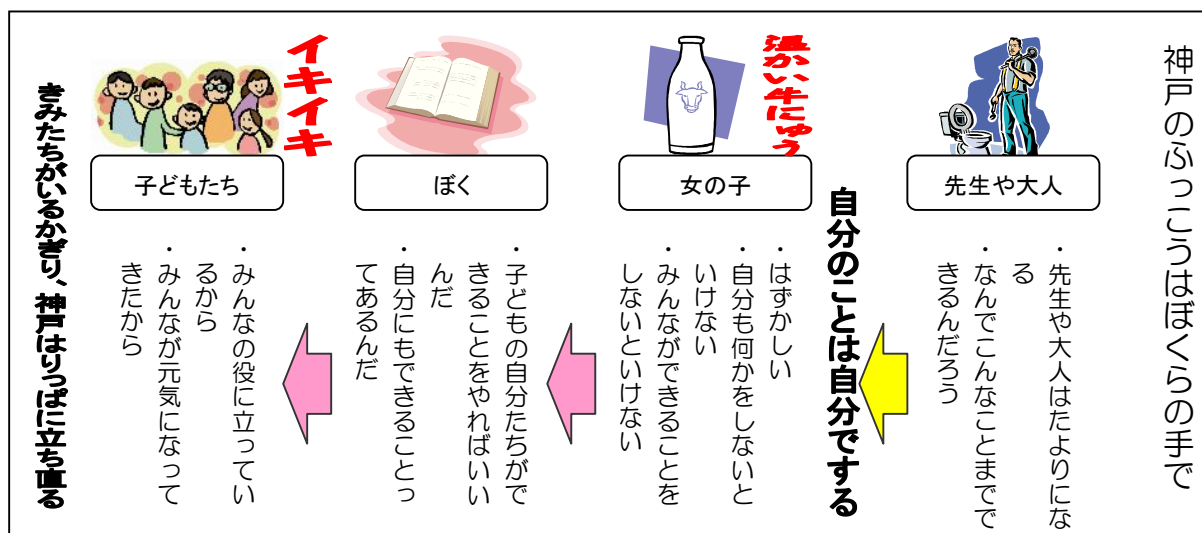
場面3 (小さいこのために本を必死でさがす) (中心場面)

- ◎ にこにこ顔になった小さい子を見て、ぼくはどんな気持ちになったでしょう。

場面4 (子どもたちや、お年寄りの世話をする)

- なぜみんな、いきいきしてきたのでしょうか。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 社会科・特別活動(学級活動・学校行事)・当番活動、係活動
- 心のノート 「みんなのために流すあせはとても美しい」(3,4 年用 76-79 頁)

5) 読み物資料

神戸のびっぴはぼくの手

地しんのあったその日、一月十七日から、この学校がぼくたちの家になった。ぼくが学校に着いたときには、体育館や教室は、ひなんしてきた人たちでいっぱいになっていた。

「宮本くん、こっちだ。こっちにおいで。」

と、とっぜんぼくをよぶ声が出た。向こうで大浜先生が手まねきしている。先生のおかげで、やっと体育館のすみにこしをおろすことができた。寒さの中で、ぼくたちのひなん生活が始まった。

三日目の朝、一大事が起こった。便所に行くと、大便が便器に山もりになっている。ぼくは、とっさに大浜先生をよびに走った。

「大浜先生、来てください。」

便所を見た先生は、すべに「ニールの手ぶくろとこみぶくろを取りにいった。そして手ぶくろをはめ、こみぶくろにもくもくと、すくっては入れすくっては入れをくり返した。ぼくは、びっくりして大浜先生の様子を見ているだけだった。そのとき、

「先生、すみません。わたしにもやらせてください。」

そう言ったかと思うと、見ていたおとなの人たちが次々と手伝いだした。このことがあってから、ひなんしてきたおとなの人たちは、先生やボランティアの人たちと協力して、ひなん所の仕事を分たんすることになった。ぼくも、水やおべんとうを受け取りに行ったり、自分のいる場所の整理をしたり、できることは自分でするようにした。こうして、数日が過ぎた。

ある朝、外は冷たい雨だった。ふと運動場を見ると、すみの方に女の子がすわって何かしている。一年生くらいだろうか。よく見ると、牛にゅうびんを温めて配っている。ぼくももらおうと、テントの前にならんだ。女の子は、お母さんからわたされたびんをコンロで少し温め、それをお母さんにわたしている。しばらく待って、ぼくは牛にゅうびんをもらった。とても温かく感じた。

「ありがとう。」

心をこめて女の子にお礼を言った。女の子は、ぼくを見てにっこり笑い、また、牛にゅうびんを温めたした。

三十分ほどして、もう一度、その場所に行ってみた。しずくの飛び散るテントのすみに、また、女の子とお母さんのすがたがあった。ぼくは、じっと女の子を見続けた。何もしないでいるのが、申しわけないような気持ちになってきた。

「ぼくにもできることはあるのだろうか。」

そう考えているとき、小さな子どもの泣きさけぶ声が聞こえてきた。

「泣いちゃだめ。くまのぬいぐるみは もうないのよ。」

と、お母さんが言っている。ぼくははっとした。どこかにくまの絵がかいてある本があったはずだ。ぼくは、必死でさがし、その子の所につけよった。絵を見せてあげると、にこにこした顔になってきた。

「へそだ、これだ。」

ぼくは、さっそく体育館にひなんしている子どもたちと相談した。

「ねえ、小さな子のために、何かできることをしようよ。」

「ぼくもそう思う。」

「本を読んであげたり、紙しばいをしてあげるのどう。」

「そうね。ほかにも何かできることはないか、みんなで考えようよ。」

こうして、今では夕方になると、図書室は絵本や紙しばいの部屋になり、子どもたちの楽しそうな声が聞こえる。また、お年寄りの世話をする係もできた。手を引いて便所につれていってあげたとき、おばあちゃんは安心したような顔をした。

みんな、いきいきしてきたようだ。大浜先生は、いつもこう言っただけましてくれる。

「きみたちがいるかぎり、神戸はのびっぴに立ち直る。」

出典 文部省道徳教育指導資料（指導の手引き）6

小学校 3・4年生 2学期 (きまりの意味を考える)

「 にじ色のふん水 」

1) 主題名 みんなのやくそく 内容項目4ー(1)

約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。

2) 展開の概要

- ねらい ケイといっしょに遊んでいたときのパルの気持ちを考えることを通して、みんなのものを大切にしようとする意欲を養う。

● 指導の流れ

場面1 (ケイとやくそくをし、パルは走って帰る)

- 走って帰りながらパルは、どんなことを考えていたでしょう。

場面2 (だまりこむケイと、ぶらぶらと広場のほうに歩きはじめる)

- ぶらぶらと広場のほうに歩きながら、パルはどう考えていたでしょう。

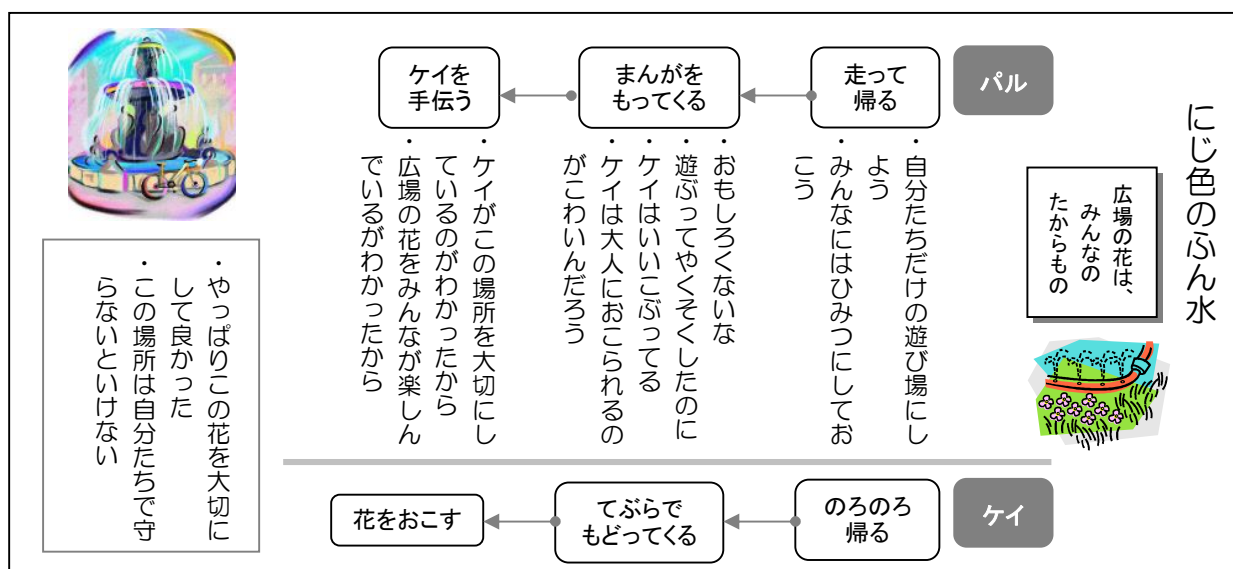
場面3 (ケイの手つだいをはじめる) (中心場面)

- ◎ パルは、何故ケイの手伝いをはじめたのでしょうか。

場面4 (立ち上がり、息をのんでふん水を見つめる)

- にじ色のふん水を見たとき、パルはどんな気持ちになったでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 社会科・特別活動(学校行事)
- 心のノート 「やくそくやきまりを守るから仲よく生活できる」(3,4 年用 72-75 頁)

5) 読み物資料

にじ色のふん水

ある秋の日、パルとケイが広場にやって来ました。

広場には、ふしぎなふん水がありました。何かあると、それがわかって、楽しくなったり、悲しくなったりするらしく、ふん水の色が、さまざまに変わるのです。

ふん水のまわりの花だんには、白くてせの高い花が、さきみだれていました。この町のじまんの花で、

《広場の花は、みんなのたからもの》
と、書かれた立てふだが、立っていました。

パルとケイは、花だんに行ってみました。ヒマワリほども高いくきに、バラのようなかわいい花がたくさんついていて、それがずっと広がっているようすは、それはそれは、みごとでした。

でも、くきがたおれて、ぽっかりと大きなあながあいているところがありました。だれかが入ったあとにちがいありません。

パルは、そっと、入ってみました。そこからは、広場は見え、まるで花の中の、ひみつの家のようです。

「ケイ、おいでよ！ ここ、ほくたちのひみつの家にしようよ！」

「そんなところで遊んじゃ、だめだよ。パル。」

「だって、だれかが遊んだあとなんだよ。来てごらん。」

パルは、ケイを引っぱってきました。

「ほら、すごいだろう。ここなら、いろんなことをして遊べるよ。」

「ほんとだ！ 外から見えないしね。」

「うちに帰って、遊ぶものを持ってこよう。」

「でも……。」

「心配ないさ、ケイ。何かゲームを持ってこようよ。やくそくだよ。」

パルは、走って帰りましたが、ケイは、どうしたのでしょうか。のろのろと帰っていききました。

まもなく、パルは、まんがの本を二、三さつかかえてきました。

ケイは、手ぶらです。

「どうしたの、ケイ？ ゲームを持ってこなかったの？」

「ほく、ここで遊びたくないんだ……。」

「やくそくしたのに、ケイ、するじゃないか。」

ケイは、だまりこんでしまいました。ケイがそんなふうですから、パルもおもしろくありません。二人は、ぶらぶらと広場のほうに歩きはじめました。

広場では、小さな子どもたちが、ブランコやシーソに乗って遊んでいます。花の絵をかいているおじさんがいます。ゆったりとベンチにこしかけて、ふん水を見ているおばさんもいます。

みんな楽しそうです。ケイが言いました。

「ほく、ちょっと、家に行ってくる。」

「ゲームをとってくるんだね。」

首を横にふって、走って行ったケイは、すぐに、竹のぼうと、ひもをたくさん持って、もどってきました。そして、さっきのひみつの家に行くと、たおれている花のくきを起こしては、竹のぼうにむすびつけ、まっすぐに立てはじめました。

つまらなさそうに、ケイのすることをながめていたパルでしたが、そのうちに、ケイの手つたいをはじめました。手が土でよこれ、ひたいにあせが流れました。でも、まっすぐに立った花たちは、うれしそうにそよ風に頭をふっています。パルが言いました。

「何だか、いい気持ちだね。」

そよ風はしずかに流れて行き、ふん水のコまかいきをゆすりました。するとそのとき、ふん水の色が急に変わりました。

「あつ、ふん水に、にじが！」

ふん水を見ていたおばあさんが、さげびました。パルとケイも立ち上がり、息をのんで見つめました。

青い空の下で、にじ色のふん水は、きらきらとかがやき、花たちは明るくわらっているようでした。

小学校 3・4年生 2学期 (きまりの意味を考える)

「雨のバスていりゅう所で」

1) 主題名 きもちよくくらすために 内容項目4-(1)

約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。

2) 展開の概要

- ねらい バスの中で自分の行動を考えるよし子の姿を通して、約束やきまりが持つ意味を理解し、それを守ろうとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (バスが来るのが見えた)

- バスが見えたとき、よし子はなぜ先頭に並んだのでしょうか。

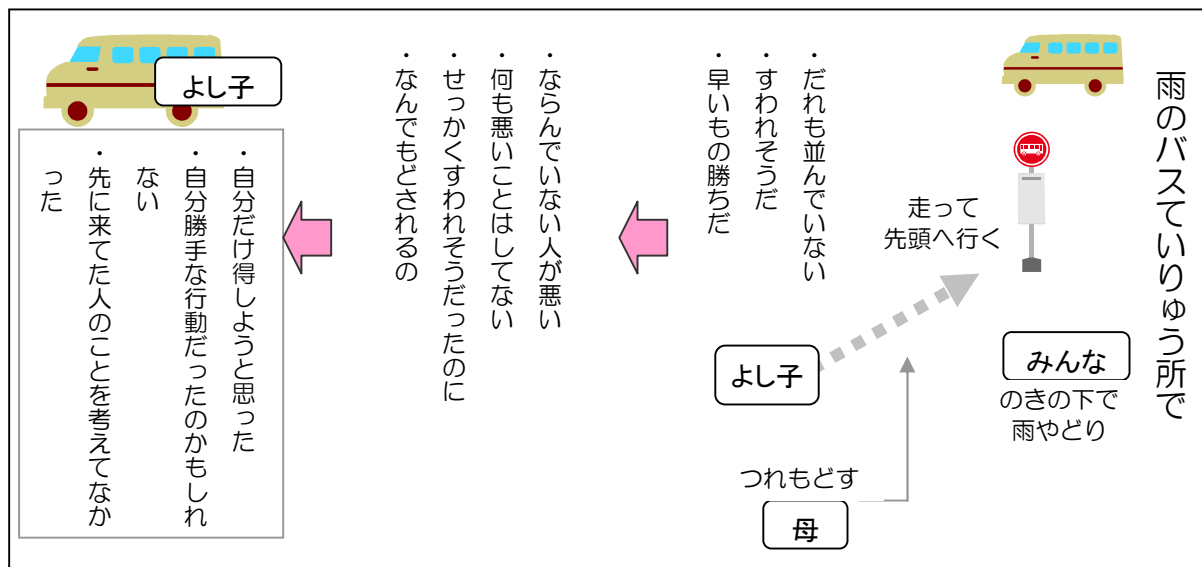
場面2 (お母さんにかたを強く引かれ、後ろに連れもどされる)

- お母さんに連れもどされたとき、よし子はどんな気持ちだったでしょう。

場面3 (バスの中でよし子が自分がしたことを考えはじめる)

- ◎ お母さんの顔を見ながら、よし子はどんなことを考えていたでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 社会科・特別活動(学校行事)
- 心のノート 「やくそくやきまりを守るから仲よく生活できる」(3,4年用72-75頁)

5) 読み物資料

雨のバスでいりゆう所で

きょうは、お母さんといっしょに、おばさんの家に出かける日です。ところが、朝から雨がふっています。よし子さんは、少しつまらなくなりました。家を出るときには、雨はいっそう強くなり、おまけに風もふいてきました。おみやげが入っている紙ぶくろにも、大つぶの雨がどんどんふりかかります。

バスのでいりゆう所では、バスをまつ人たちが、たばこ屋さんのき下で雨やどりをしています。のき下に入っても、雨はよし子さんの長ぐつや紙ぶくろにふきつけます。雨やどりをしている人たちは、バスが来る方々をときどき見ています。

遠くの方に、小さくバスが見えました。

よし子さんは、雨の中へタタッとかけ出すと、でいりゆう所で一ばん先とうにならびました。バスが来たことを知った人たちは、そろそろとでいりゆう所にむかって歩きはじめました。

その時です。うしろの方で、お母さんの声が聞こえたような気がしました。よその人の声も、聞こえたように思いました。でも、どしゃぶりの雨なので、よし子さんはべつに気にもしませんでした。

バスが止まりました。

よし子さんがかさをつぼめようとしたとき、かたが強い力でうしろの方に、ぐいと引かれました。かたをしっかりつかんだ、ものすごく強い力で、びっくりしてふりかえると、お母さんの手でした。よし子さんは、ハッとしました。それでもお母さんは何も言わないで、よし子さんをお母さんがならんでいた所までつれていきました。いつものお母さんの顔とちがって、とてもこわそうな顔でした。

バスに乗る人たちのれつが、動きはじめました。よし子さんは首をよこに出して、ならんでいる人の数を数えました。よし子さんは、前から六番めでした。ひとりひとりがかさをつぼめてバスに乗るので、いつもとちがって時間がかかります。

「前の人たちは、どうして早く乗ってくれないのだろう・・・。」
よし子さんは、こんなことを考えながら、少しじりじりした気持ちで前へ進みました。

バスに乗りました。でも、もうざせきはあいていませんでした。

「ほら、ごらんさない。」

と言うつもりで、よし子さんはよこに立っているお母さんの顔を見上げました。そんなよし子さんに知らぬふりをして、お母さんはだまったまま窓の外をじっと見つめています。いつもなら、やさしく話しかけてくれるお母さんです。でも、きょうのお母さんは、いつもとはぜんぜんちがうのです。

そんなお母さんのよこ顔を見ていたよし子さんは、自分がしたことを考えはじめました。バスの窓には、大つぶの雨がしきりにふきつけていました。

出典 文部省 小学校 道德の指導資料とその利用2

小学校 3・4年生 3学期 (自分を見つめ、よいところをのばす)

「 勇太への宿題 」

1) 主題名 よいところをのばす 内容項目1ー(5)

自分の特徴に気づき、良い所を伸ばす。

2) 展開の概要

- ねらい 信夫からの宿題を考える勇太を通して、自分の特徴を知って悪いところは改め、良いところを伸ばそうとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (勇太の大声が校庭にひびく)

- 「もっとはやくパスしろよ」と言うときの勇太はどんな気持ちでしょう。

場面2 (信夫から手紙をうけとる)

- 信夫からの手紙を読んだとき、勇太はどんなふうに思ったでしょう。

場面3 (A選手の記事や信夫の練習を見る)

- A選手の記事や信夫の練習を見ながら、どんなことを考えたでしょう。

場面4 (「先生、ぼく、わかったような気がします。」と言う) (中心場面)

- ◎ 勇太がわかった『長所を生かす』とは、どんなことでしょう。

3) 板書例

・自分は今まで、自分のことだけを考えてプレーしていた ・チームプレーはお互いが相手のいいところをのばすこと ・長所でお互いの短所をカバーすることが大事	「先生、ぼく、わかったような気がします。」		しかし、もう少し勇太君の長所が生かせないかな、と思うことがあります。それはどういふことか、それを考えてほしいのです。	もう少し、長所を生かせないかな?		勇太への宿題
		・サッカーは一人では勝てない ・伸夫はいつもチーム全体のことを考えてプレーしている ・みんな自分の持ち味がある		・ぼくの長所って何だろう ・ぼくのおかげで試合に勝っているのに... ・長所が生かせてないのかな。		・ぼくにパスしたらゴールを決めるのに ・試合に勝ちたいならぼくにパスを出せよ

4) 他の教育活動との関連等

- 読書活動 (先人の伝記)
- 心のノート 「自分のよいところはどこだろう？」(3,4 年用 28-31 頁)

5) 読み物資料

勇太への宿題

「ああ、また、はすれちゃった。もっとはやくぼくにパスしろよ。」
勇太の大声が校庭にひびいている。

「いくらうまいからといって、そんな言い方はひどいなあ。自分勝手だよ。」

「そうだ、そうだ。シュートはいつも勇太君がしてしまうんだもの。」

放課後行われる地域のサッカークラブの練習では、このような会話がよく聞かれる。

勇太は、たしかにドリブルはうまいし、シュートもピシッと決める。そのことはみんなが認めているが、どうもみんなとしっくりいかない場合が多い。

いつも元気な勇太が、足の骨を折って入院し、一週間が過ぎた。勇太は、学校のことを気になり始めていた。

そんなとき、サッカー仲間の信夫がみまいに来てくれた。

「勇太君、気分はどう。心配したよ。サッカーの練習も君がいないとやっぱり困るんだ。早く元気になってよ。」

と、勇太をはげました。信夫は、学校のようにすや最近のサッカーの練習などいろいろ話してくれた。そして、帰りぎわに、

「これは、勇太君への宿題が書いてあるんだ。入院中にじっくり考えてほしいなあ。」

と言って、手紙をわたしてくれた。

そこには、次のようなことが書いてあった。

君がいらないサッカーは、とてもさびしいです。早く元気になってください。ベッドでねているのも大変だろうから、一つだけ宿題を出します。勇太君は、シュートがとても上手です。それは、君の長所です。勇太君のシュートのおかげで勝つことも多い。しかし、もう少し勇太君の長所が生かせないかなあ、と思うことがあります。それはどういふことか……、それを考えてほしいのです。

勇太君には、信夫の言いたいことが、そのときはよく分からなかった。

勇太は、退院してからも、しばらくは運動はできなかった。

校庭では、その日も、サッカーの練習をしていた。勇太は、教室の窓から友達

の楽しそうな練習を見ながら、信夫からの宿題をぼんやり考えていた。

「勇太君、どうしたんだ。」

担任の日高先生の声には、はっとした。勇太は、信夫からの手紙を先生に見せた。

「君は、よい友達がいていいな。」

と、言いながら、先生は、自分の机のところにいき、引き出しの中から次のような新聞記事を取り出し、見せてくださった。

それは、勇太が目指している、大好きなA選手のことについて書いてあった。

「……A選手のシュートは、時速百三十キロもある。しかも重い。そんなシュートがうつるようになるために、子どものころから、ふろの中の水をけるなどして足の筋肉をきたえた。

かれが日本を代表する選手になれたのは、自分の体や技をきたえただけではなかった。所属するチームのみんなとの信頼関係をつくることに努力した。かれは言っている、『自分の才能が実ったのは、それを支えてくれたチームのみんなの協力があったからだ。だから、自分も、どうしたらチームのためになるかを、常に考えていた。』……」

校庭では、放課後の練習が続いていた。

試合形式での練習が一段落すると、たてにつなぐパス、横に回すドリブル、シュートなどの基礎的な練習に移った。シュートの練習では、走ってくる相手にけりやすいボールをちょうどいい所にパスしている信夫の姿が目についた。

(そつえば、信夫からのパスで、ぼくは何度もゴールを決めている。信夫君は、チームの中で自分の役割を理解して、自分のよさをチームの中で生かしている。シュートばかりにこだわっていた自分は……)

「先生、ぼく、分かったような気がします。」

と勇太は言った。先生は、笑顔でうなずかれた。

小学校 5・6年生 1学期 (相手の身になって考える)

「最後のおくり物」

1) 主題名 思いやりの心 内容項目2-(2)

だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。

2) 展開の概要

- ねらい □ベーヌがジョルジュじいさんからもらったものを考えることを通して、相手の立場に立って親切にしようとする心情を養う。

● 指導の流れ

場面1 (おくり物が届かなくなる)

- 唇をかむ□ベーヌはどんな気持ちだったでしょう。

場面2 (仕事を休んで付きそいをすることを決心する)

- なぜ「息子です」ときっぱりといったのでしょうか。

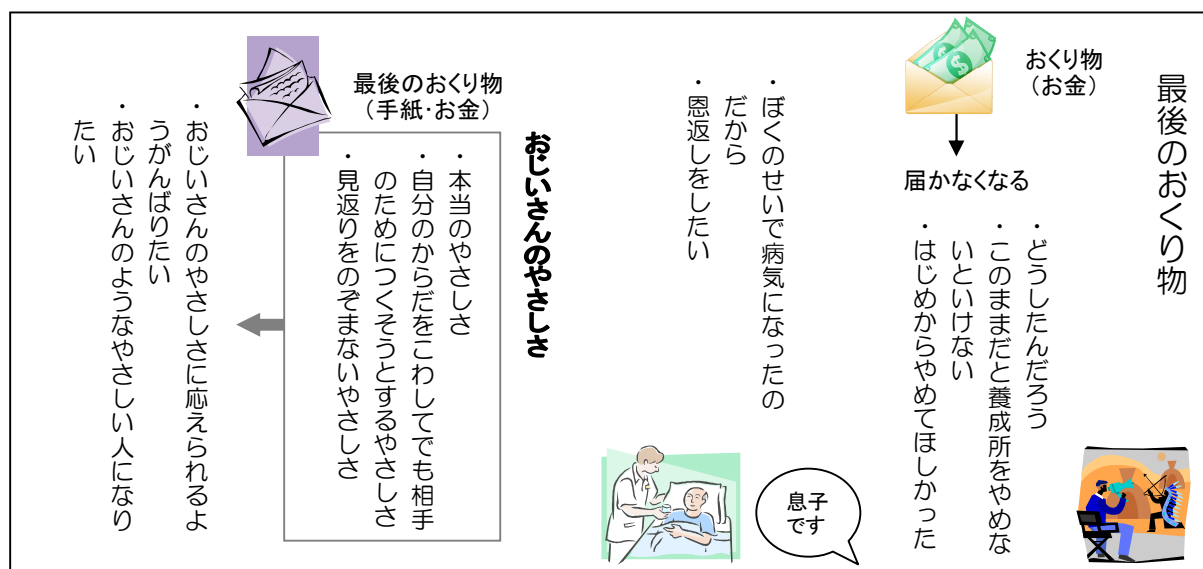
場面3 (最後の手紙を取り出して読む) (中心場面)

- ◎ □ベーヌはジョルジュじいさんから、お金と一緒に何をもらったのでしょうか。

場面4 (何かを決意したように、遠くに視線を移した)

- このとき□ベーヌはどんなことを考えていたでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 小集団活動・異年齢集団活動
- 心のノート 「あなたの心にあるそのあたたかさ」(5,6年用 44-47頁)

5) 読み物資料

最後のおくり物

ロバーヌの夢は、有名な劇団「アルベル」の俳優になることだった。地方から一人でこの町に出てきたロバーヌには、養成所に通う余裕はなく、自分なりの練習を重ねていた。ある日の夜、養成所がどのような練習をしているのかを知ろうと、窓越しに中をのぞいてみた。あまりの練習のきびしさと熱心さにおどろき、ロバーヌは、思わず立ちすくんでしまった。

それから、たびたび夜の窓の下で熱心にメモを取るロバーヌの姿が見られた。たまりかねて声をかけたのが、守衛のシオルシュじいさんだった。シオルシュじいさんは、ロバーヌの話を聞き、

「本当なら許されないが、他の守衛仲間にもわたしから話しておくよ。」

と、言ってくれた。その日から、雨の日も風の日も、窓越しに練習のようすを熱心に見入るロバーヌの姿があった。

三カ月ほどたった日の朝、ロバーヌは、アパートのドアの下に小さな紙の包み紙を見つけた。中には、養成所の月謝代に使ってください、という手紙とともに、何枚かのお札が入っていた。自分にこんなことをしてくれる人を、ロバーヌは思いつかなかった。よく月も、その次の月もおくり物は届いた。

「お金をそのまま受け取ってもよいものでしょうか。だれが送ってくれるのか探したんですが分らないんです。」

思いあまって、ロバーヌはシオルシュじいさんに相談してみた。

「きつとあなたに期待をかけている人なんだろうね。このお金は今借りていると思えばいいじゃないか。むだにしないようにがんばることだね。」

そう言った後で、

「あつ、そうそうわたしは今度、昼間の勤めに変わることになったのね。しばらく会えなくなるけど、くじけちゃだめだよ。」
 と言って、やさしくほほえみかけた。

養成所に通い始めたロバーヌは、一生けん命に練習に取り組んだ。日に日に実力を身に付け、先生や仲間からもしだいに認められるようになってきた。ロバー

ヌは、いっそう練習に力が入った。

ところが、しばらくしてとつ然おくり物が届かなくなった。次の月も、その次の月も、やはりおくり物は届かなかった。はらえない月謝がたまり始めた。「せつかくここまでできたのに……。」

ロバーヌは、思わずくちびるをかむのであった。

そんなある夜ふけに、とびらの外にかすかに人の気配がした。そとげん関の方をそくと、雪明りの中にかがみこんで何かを置いている人かげが見えた。

「シオルシュじいさん……。」

ゆっくりと起き上がったその顔が見えたとき、ロバーヌは息を飲んだまま、その場を動くことができなかった。シオルシュじいさんは、立ち去ろうとしたが、そのようすがおかしい。かけ寄ってみるとシオルシュじいさんは苦しそうに息をしていた。ひどい熱、ロバーヌは、だきかかけて自分の部屋につれて行き、ベッドにねがせると、急いで近くの病院に向った。げん関のわきには、見慣れない紙の包みがあった。

「難しい状態です。大分すい弱してますから。とにかく、だれか付きそいが必要です。」

医師がそう言ったとき、来ていた仲間の守衛たちが顔を曇らせた。

「体をこわして休んでいたのに、また無理して働き始めたからだろうね……。困ったなあ、このじいさんには身寄りがないんだ。」

と、だれかが言った。

付きそいとなれば、仕事を休まなければならない。ロバーヌは、しばらくうつむいていた。が、きっぱりと言った。

「ほくが付きそいます。息子なんです。」

それからは、付きっきりで、ねむり続けるシオルシュじいさんのかん病をした。しかし、体は日に日に弱っていった。

三日目の夜、シオルシュじいさんは、かすかにほほえみながら、ロバーヌに小さな声で語りかけた。

「迷わくをかけることになって悪かったね。」

「そんな……。」

「息子だと言ってくれたんだね。」

「そんなことより、ぼくのためにこんなに苦しむことに……。」

「ちっとも苦しくはなかったよ……、幸せを感じたくらいだ。」

どこまでも気づかってくれるシオルジュいさんの言葉に、ロペー又はかたをふるわせた。

「ぼく、おじいさんに謝らなければ。……お金が届かなくなったとき、ぼくはつらみました。本当におろかでした。どんなに苦しんでいたのかも知らないで許してください。……でも、どうして見ず知らずのぼくなんかに。」

「わたしも俳優になりましたかった……。きみの姿を見ていて……。ありがとつ、がんばるんだよ……。」

シオルジュいさんは、そう言うと、ロペー又の手をとったまま、またねむりについた。それからしばらくして静かに息を引き取った。

その夜、ロペー又はシオルジュいさんからの最後の手紙を取り出し、もう一度読みはじめた。

おくれていたお金を入れておきます。もつすべ、劇団の新人募集の試験がありますね。私は心よりあなたの努力が実ることを願っています。あなたの初ぶ台を一日も早く観られることを心待ちにしています。

手紙の文字がなみだでかすんだ。その中に、シオルジュいさんの語りかけるようなやさしい家顔がうかんできた。

ロペー又は、何かを決意したかのように、遠くに視線を移すのだった。



小学校 5・6年生 1学期 (相手の身になって考える)

「手品師」

1) 主題名 誠実な態度 内容項目1ー(4)

誠実に、明るい心で楽しく生活する。

2) 展開の概要

- ねらい 手品師がなぜ友人の誘いを断って男の子との約束を果たしたのかを考えることを通して、誠実に人に接しようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (男の子に明日も来ることを約束する)

- きっと来るよと約束したのは、どんな気持ちからでしょう。

場面2 (仲のよい友人から電話がかかってくる)

- 友人からの誘いを受けたとき、手品師はどんなことを考えたでしょう。

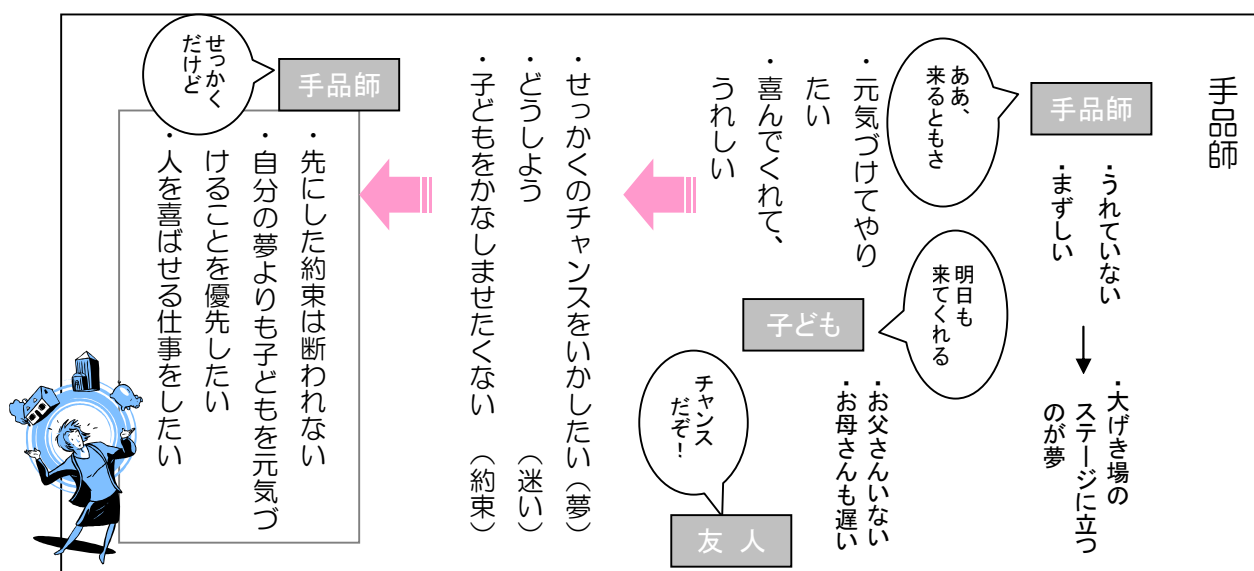
場面3 (受話器を持ちかえて、きっぱりと断わる) (中心場面)

- ◎ 手品師はなぜ友人からの誘いを断ったのでしょうか。

場面4 (たった一人のお客様を前にして、素晴らしい手品を演じる)

- 子どもを前にして、どんな気持ちで手品をしているのでしょうか。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 各教科・係活動、当番活動
- 心のノート 「まじめであることはわたしのほこり」(5、6年用 24-27頁)

5) 読み物資料

手品師

あるところに、うではいいのですが、あまり売れない手品師がいました。もちろん、くらしむきは楽ではなく、その日のパンを買うのも、やっとというありさまでした。

「大きな劇場で、はなやかに手品をやりたいなあ。」

いつも、そう思うのですが、今のかれにとっては、それは、ゆめでしかありません。それでも手品師は、いつかは大劇場のステージに立てる日の来るのを願って、うでをみがいていました。

ある日のこと、手品師が町を歩いてみると、小さな男の子が、しょんぼりと道にしゃがみこんでいるのに出会いました。

「どうしたんだい。」

手品師は、思わず声をかけました。男の子は、さびしそうな顔で、おとうさんが死んだあと、おかあさんが、働きに出て、ずっと帰ってこないのだと答えました。

「そうかい。それはかわいそうに。それじゃおじさんが、おもしろいものを見せてあげよう。だから、元気を出すんだよ。」

と言って、手品師は、ぼつしの中から色とりどりの美しい花を取り出したり、さらに、ハンカチの中から白いハトを飛び立たせたりしました。男の子の顔は、明るさを取りもどし、すっかり元気になりました。

「おじさん、あしたも来てくれる？」

男の子は、大きな目を輝かせて言いました。

「ああ、来ることもね。」

手品師が答えました。

「きつとだね。きつと、来てくれるね。」

「きつとさ。きつと来るよ。」

とうせ、ひまなからだ、あしたも来てやろう。手品師はそんな気持ちでした。

その日の夜、少しはなれた町に住む仲のよい友人から、手品師に電話がかかってきました。

「おい、いい話があるんだ。今夜すべ、そっちをたって、ほくの家に来い。」

「いったい、急に、どうしたと言った。」

「どうしたも」つしたもない。大劇場に出られるチャンスだぞ。」

「えっ、大劇場に？」

「そうとも、二度とないチャンスだ。これをのがしたら、もうチャンスは来ないかもしれないぞ。」

「もうすこし、くわしく話してくれないか。」

友人の話によると、今、ひょうばんのマジック・ショウに出演している手品師が急病でたおれ、手術をしなければならなくなったため、その人かわりをさがしているのだというのです。

「そこで、ぼくは、きみをすいせんしたというわけさ。」

「あ、う、一日のばすわけにはいらないのかい。」

「それはだめだ。手術は今夜なんだ。明日のステージにあなをあげるわけにはいかない。」

「そうか……………」

手品師の頭の中では、大劇場のはなやかなステージに、スポットライトを浴びて立つ自分のすがたと、さっき会った男の子の顔が、かわるがわる、うかんでは消え、消えてはうかんでいました。

（このチャンスをのがしたら、もう二度と大劇場のステージには立てないかもしれない。しかし、あしたは、あの男の子が、ぼくを待っている。）

手品師はまよいに、まよっていました。

「いいね、そっちを今夜たてば、明日の朝には、こっちに着く。待ってるよ。」

友人は、もう、すっかり決めこんでいるようです。手品師は、受話器を持ちかえると、きっぱりと言いました。

「せっかくだけど、あしたは行けない。」

「えっ、どうしてだ。きみがずっと待ち望んでいた大劇場に出られるというのだ。」

これをきっかけに、きみの力が認められれば、手品師として、売れっ子になれるんだぞ。」

「ぼくには、あした約束したことがあるんだ。」

「そんなに、たいせつな約束なのか。」

「そうだ。ぼくにとっては、たいせつな約束なんだ。せっかくの、きみの友情に對して、すまないと思うが……………」

「きみがそんなに言うなら、きつとたいせつな約束なんだろう。じゃ、残念だが……………」

また、会おう。」

よく日、小さな町のかたすみで、たったひとりのお客さまを前にして、あまり売れない手品師が、つきつきとすばらしい手品を演じていました。

小学校 5・6年生 1学期 (相手の身になって考える)

「ロレンゾの友達」

1) 主題名 本当の友情 内容項目2－(3) 関連項目4－(1)

互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。

2) 展開の概要

- ねらい 友人のロレンゾを思うアンドレ、サバイユ、ニコライの考えを通して、信頼や友情の意味について考えようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (夜中にロレンゾが家に来た場合、どうするかを話し合う)

- 三人はどんな考えを持っていましたか。
- 三人の考えに共通している思いは何でしょう。

場面2 (酒場で再開を祝う)

- 木の下で話し合ったことを、だれも口にしなかったのはどうしてでしょう。

場面3 (酒場を出て、あらためて考える) (中心場面)

- ◎ 三人があらためて考えたことは、どんなことでしょう。

3) 板書例

……
(口にしない)

・ 友達を疑っていたから
・ 疑っていたのを知ったら気まずくなるから

・ 友達なら言いくらいことも言わないといけない
・ 友達だからこそ、注意しないといけない
・ しんどいときこそ、そばにいてくれる友達をつくりたい

ニコライ

自首をすすめる。
警察に知らせる。

・ 本当の友達だからいけないことはないという

サバイユ

自首をすすめる。
にがす

・ 自分の考えは伝えるでも自分のことだから自分で決めさせる

アンドレ

お金を持たせ、
にがす

・ 友達だから警察には言えない
・ 助けてあげたいから

三人ともロレンゾのことを思い、
どうすればいいかを考えている

ロレンゾの友達

共通すること

4) 他の教育活動との関連等

- 心のノート 「友だちっていいよね」(5,6年用 48-51 頁)

5) 読み物資料

ロレンソの友達

アンドレ、サバイユ、ニコライ、わがなつかしき友よ。二十年ぶりの再会を楽しみにしている。愛しき故郷は変わらざるにあるだろうか。明後日の十八日の夕刻到着予定。二十年後の今もわたしを友としてむかえてくれることを確信している。あの思い出の村はすれのかしの木の下で。故郷での幼き日々を共にした友へ。

ロレンソより

「どうする。」

「どうするって。その話は本当のことなのかい。」

「まちがいない。三日前、この町の酒場に刑事がやってきて、ロレンソという男について聞いていた。働いていた会社の金を持ちにけしだらしいんだ。ここに立ち寄ったら知らせしてほしい、そう確かに言ってたよ。」

「しかし、警察に追われていながら平気で、明後日この村に帰るって電報を打ってくるなんてことあるかな。」

「ほくもそう思う。絶対何かのまちがいに決まってるよ。」

「ほくだってそう思うよ。だけど、刑事がそう言っていたのは確かなんだ。」

「信じられないなあ……、あいつがそんなことするなんて。やむにやまれぬ事情があつてのことなんだろうな。きっとそうだよ、きっと。」

「村はすれのかしの木の下で会いたいなんて、考えようによっては変だね。助けしてほしいってことだろうか。」

「しかし、かれが会いに来たらどうしたらいいだろう。」

約束の日、三人はまだ日が高いころから、約束のかしの木の下に集まり、ロレンソの来るのを待った。三人は、村に続く道のかたに目をこらしたり、あたりをうろついたり、ため息をついたりして時を過ごした。やがて日がかたむき、かしの木と三人のかげが長くのび始めた。しかし、待ち望むロレンソは現れなかった。

「おそいなあ。もしかして途中でつかまって……。」

「そのほうがよいのかもしれない。こんな状態では会いたくないからな。」

三人とも複雑な思いにとらわれ、しだいに口数が減ってきた。重苦しいふん

気を破るかのように、ニコライは言った。

「もうおそい帰ろうか。来るとすればだれかの家だろうから。」

「しかし、もし夜中にたずねてきたらどうしよう。」

しばらくくんもくがあった後、アンドレが口を開いた。

「ほくは、お金を持たせてだまってがしてやる。いけないことかもしれないけど。」

サバイユが続けた。

「ほくはロレンソに自首をすすめる。やっぱり罪は罪だよ。だけど、本人が納得しない場合は、そのままにがしてやったほうがいいと思う。」

ニコライは、苦しい表情で思いつめたように話し始めた。

「ほくもロレンソに自首をすすめる。本人が納得したらいいしよに付きそって行く。でもだめだったら、ほくは警察に知らせるほうがいいと思う。」

「それはかわいそうじゃないか。何もほくたちがそんなことをしなくても、どこかでつかまれば同じだろう。どうして、そんな友達を裏切るようなことができるのか。」

アンドレとサバイユは、おどろいたように言った。

「友達をかばってにがしてやるのも友達かもしれない。でも、そのことでびくびくしながらにげ続けたとしたら、かえって友達を苦しめることになる、とほくは思う。」

「ニコライの言うことは分かるよ。だけどほくには出来ないよ。ここまでにげて来たっていうのは、よほどの事情があるんだから。」

サバイユがそう言い終わると、三人はだまりこんだまま家路についた。

結局その夜、ロレンソはだれのところにも来なかった。三人の友は、それぞれねむられないまま夜を明かしてしまった。

翌朝、とつ然三人は町の警察署から、すぐに来てくれるようにという連らくを受けた。三人は、それぞれきん張した顔で警察署にやって来た。

「きみたちに、ぜひわたしの立ち合いのもとで話をしたいという人がいるので、来てもらったんだが……。」

対応に出た署長が言った。やがて部屋のおくの方から男が現れた。

「ロレンゾ！」

三人はいっせいに声をあげた。

「昨日はすまなかった。となりの町まで来たとき、刑事がいきなりぼくをここに連れて来たものだから、連らぐがつけられなかったんだ。」

「わたしたちの手ちがいで、大へんご迷わくをかけてしまつて……。」

署長は深々と頭を下げた。

「まちがいだったんだね！」

「人ちがいだよ。ぼくは無実だよ。」

「本当に申しわけない。昨日の夜中に私の所に連らぐがあつてね。」

署長は頭をかいた。三人はとにかくほつとした。

アンドレは、ほほをゆるめながらロレンゾのかたに手をかけた。

「よかった、よかった。きみは絶対にそんなことはしないと思っていたよ。」

「少しは、心配もしたけどさ。」

四人は大笑いしながら、あらんかぎりの力でだしめ合った。

その夜、再開を祝つて町の酒場へと向つた。思い出話はずきることがなかった。しかし、あのかしの木の下で話し合ったことは、三人とも口にしなかった。酒場を出た後、それぞれに、もしロレンゾが本当に罪を犯して帰つて来ていたとしたら、自分は友人としてどうすべきだったのか、どうしていたのだろうか、とあらためて考え始めた。

出典 文部省道德教育指導資料（指導の手引き）4



小学校 5・6年生 2学期 (役割や責任を自覚する)

「森の絵」

1) 主題名 責任を果たす 内容項目4-(3)

身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。

2) 展開の概要

- ねらい えり子が、なぜいきいきポスターカラーをときはじめてのかを考えることを通して、自分の役割を自覚し、責任を果たそうとする意欲を養う。

● 指導の流れ

場面1 (朝の練習が進み、みんなそれぞれの仕事をきびきびとこなす)

- えり子は、どうして絵筆を持つ手に力が入らなかったのでしょうか。

場面2 (授業中、文男がししゅうしている後ろすがたを思い出す)

- 文男の後ろすがたを思い出しながらえり子は何を考えていたのでしょうか。

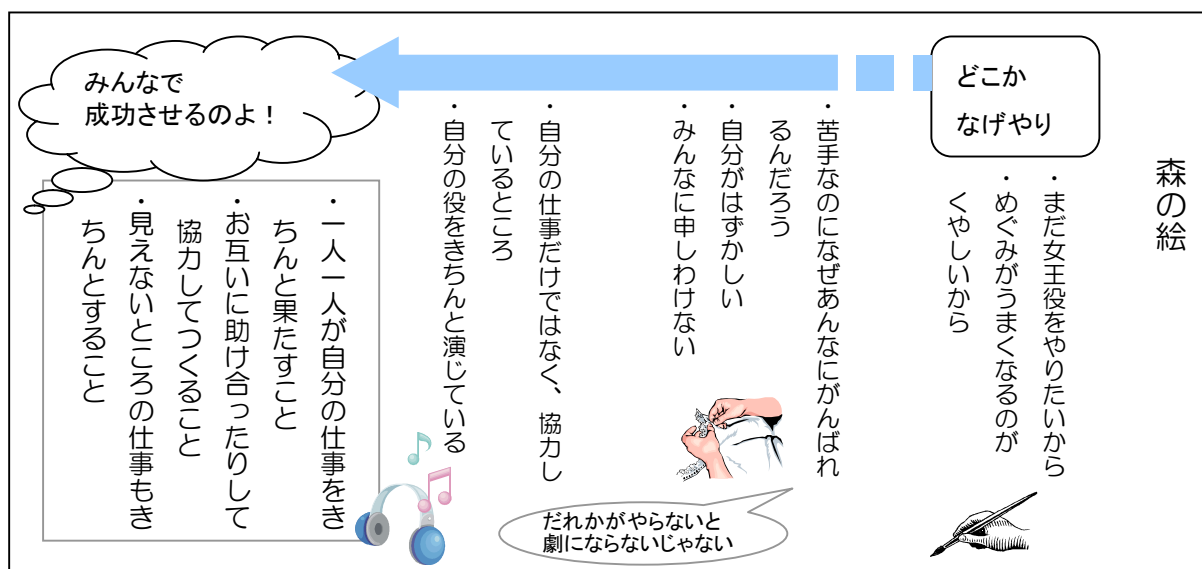
場面3 (めぐみは放送室でBGMの録音を熱心に手伝う)

- えり子は、めぐみのどんなところをがんばっていると思ったのでしょうか。

場面4 (えり子はいきいきとブルーのポスターカラーを皿にときはじめて) (中心場面)

- ◎ えり子が考えるみんなで劇を成功させるとはどんなことでしょうか。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 特別活動 (学級活動・学校行事)
- 心のノート 「いきいきしている自分 かがやいている仲間」 (5,6 年用 88-91 頁)

5) 読み物資料

森の絵

まっ白い雪の森を、こごえきった少女がさまよっている。ふと見ると、あたたかいたき火を囲んで楽しそうに歌っている十二か月の精たち―。

えり子は、前に家族で見に行った『森は生きている』の舞台を思い出していた。その劇を、えり子のクラスが学習発表会でやることになったのだ。

（主人公の少女は、無理かもしれない。でも女王は個性があって、おもしろそうだし、女王ならやってみたいなあ。）

学級会で、みんなで役を決めることになった。女王役をやりたいと手をあげた人がもう一人いた。めぐみだった。

二人で女王のせりふを読んだ。めぐみの方がうまい。みんなのはく手も、やはりめぐみの方が多かった。えり子は言った。

「めぐみさん、わたし、ほかの役をやる。がんばってね。」

みんなで役を決めていき、えり子は八月の精になった。ちょっといやだな、と思ったけど、劇はクラスみんなで作りあげるものなんだからと、自分に言い聞かせた。

司会の修が言った。

「次に、衣装係、道員係、照明係を決めます。」

「わたし、音響効果係をやりたい！」

「ぼくは工作がすきだから、道員係になって舞台装置を作りたいな。」

いろんな声が飛びなかに、えり子は道員係を選んだ。絵は得意なほうだったし、装置に絵をかくくらいのことなら、できると思ったからだ。

それからのえり子のクラスは、劇の準備で大いそがしかった。

劇の練習で、めぐみがどんどんうまくなっていくのがよくわかった。めぐみは、たしかに才能がある。女王の冷たさのある品のよさを、みごとに演じていた。

朝の練習も進み、みんな、それぞれの係の仕事をきびきびとこなしている。道員係では、男子たちが、ベニヤ板の森の装置を作りあげた。舞台に立てるもみの木や、バックのもみの木の森。

図工室にならんだそれらの装置に色をつけたり、花を作るのがえり子たちの仕事だった。

でも、えり子はどこかなげやりだった。なまけようとしているわけではない。絵筆を持つ手に力が入らないのだ。

図工室で、もう一人仕事をしている人がいた。衣装係の文男だ。文男は、水色の女王のガウンに銀色の花のししゅうをしていた。なれない手つきで一針一針といねいにぬっている。

「文男さん、ししゅうがすきななの？」

えり子が聞くと、文男の目がいたすらっぽく笑った。

「すきじゃないさ。ぼくがししゅう係だなんて、おどろいたよ。でも、だれかがやらないと、劇にならないじゃないか。けっこう、うまいだろう。」

えり子は、だまっていた。

しばらくして、絵の具をぬるのにあきてきたえり子は、文男に声をかけた。

「つかれたね、文男さん。今日はもう帰ろうよ。」

「ぼく、もう少しやっていく。下校時刻まで、まだ時間があるもの。」

文男さんって、こんな人だったのかなと、えり子は思った。

次の日の朝、絵の具のかわきぐあいになって、図工室へ行ってみた。ドアを開けると、文男がししゅうをしている後ろすがたが見えた。えり子には気がつかないようだった。そっとドアをしめた。

授業中、文男がししゅうをしている後ろすがたが思い出された。

「だれかがやらなきゃ、劇にならないじゃないか。」と言った、文男の言葉が気になった。

昼休みに、めぐみは、放送室で熱心にBGMの録音を手伝っていた。

「よし、めぐみさん、それでいい。この音楽はポリウムをさげて使おうよ。」

満足したように、修が言った。めぐみも、がんばっているのだ。

えり子が図工室へ行くと、文男が話しかけてきた。

「森の絵、そろそろ完成だね。感じ出てるよ。」

「もう少し、ブルーでかげをつけようかなと思って。」

「それがいいね。ずっとよくなるよ。」

えり子は、いきいきとブルーのポスターカラーを皿にときはじめた。

（『森は生きている』の幕が開いたら、みんながあっとおどろくような、すてきな森の絵をかこう。そう、劇を成功させなくっちゃ。みんなで成功させるのよー）

小学校 5・6年生 2学期 (役割や責任を自覚する)

「うばわれた自由」

1) 主題名 本当の自由とは 内容項目1ー(3)

自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。

2) 展開の概要

- ねらい ジェラル王子がとらわれの身になって初めて気づいたことを考えさせることを通して、自由を大切にし、規律ある行動をしようとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (王子が酒によって、日の出前に森で狩をする)

- 王子が考えていた自由とはどういうものでしょう。

場面2 (ガリユーが王子に注意をする)

- ガリユーが考える自由とはどういうものでしょう。

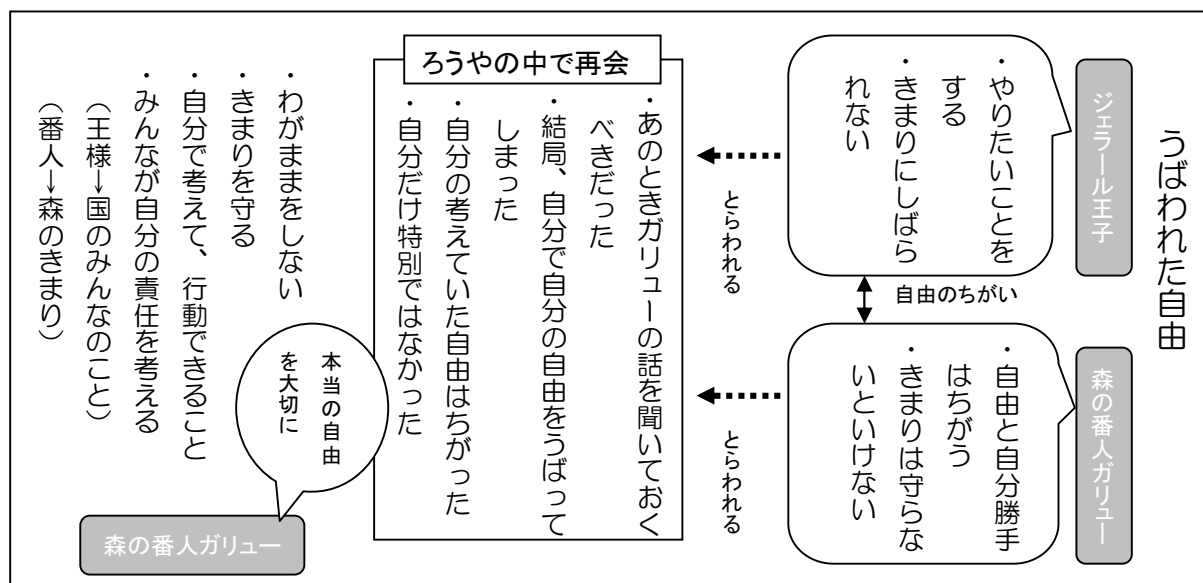
場面3 (ろうやの中で、ガリユーに再会する)

- ◎ とらわれた王は、ろうやの中でどんなことを考えたでしょう。

場面4 (ガリユーが先にろうやから出る)

- 本当の自由とはどういうことなのでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 特別活動(学校行事) 生徒指導(生活のきまり)
- 心のノート 「自由ってなんだろう」(5,6年用 20-23頁)

5) 読み物資料

うばわれた自由

「ダッダーン！」

まだ、夜の明けぬ森の中で、一発のじゅう音が山々にこだましました。

その音に目をさました森の番人ガリューは、急いで身じたくをすると、じゅう声の聞こえる方に馬を走らせた。

この森は、動物をとってはならないときめられた所である。しかも、この森でも日の出前には狩をしてはならないというきまりがあった。そのきまりを破った者を取りしめるのが、ガリューの仕事である。

「ダッダーン！」

身近に聞こえたじゅう声に、はっきりと場所をつかんだガリューは、全速力で馬を走らせた。

しばらく行くと、うす明かりに、馬に乗った三人の姿がうかび上がった。声高に話す声は、酒によっているように聞こえる。

馬のひづめ音に気付いて、

「だれか着たようです。」

と、仲間の一人が言った。

「かまわん。私がいるんだ。」

ひととき目立つ服装をしている若者は、平気な顔で言った。そして、ガリューに近づいてくる。

「森番。何か用か。」

と、にらみつけるようにして声をかけた。

ガリューと、三人の若者は向かい合った。

「ここは、動物をとってはならない所と知ってうったのか。」

ガリューは、強い調子で言った。

「もちろん知っておる。」

「日ぐれから日の出まで、狩りをしてはならないことも知っているんだな。」

「もちろん知っておる。」

「知っていながら、なぜ、じゅうをうったのだ。」

「遊びだ。よいさましには、ちようどよいのさな。」

「遊び？ よいさまし？ 何を言っているのだ。きまりを破っておきながら。とらえてやる。しんみょうにしろー！」

ガリューは、きっぱりと言った。

「はっはっはっ、私をとらえることができるかな。私は、この国の王子、ジェラルだぞ。」

「えっ……」

ガリューは、おどろいた。目だった服装の若者は、なんと、わがまま者のジェラル王子であった。ジェラルは、王子であることをよいことに、勝手気ままにふるまい、皆からおそれられていた。

「さあ、とらえられるものなら、とらえてみる。」

ジェラル王子は、いばって言った。しかし、ガリューは落ちついて、ジェラル王子の名を使って、この場を逃げようとしてもだめだ。」

と言い切った。

「もう一度言う。私はジェラル王子だぞ。王子をつかまえられるのか。」

「だれであろうと、国のきまりを破ったからにはゆるせません。国のきまりは、皆が勝手なことをしないようにするためにあるのです。これを無視しては、国はほろびてしまいます。」

ガリューは、殺されるかも知れないと思ったが、必死になってうったえた。

「堅いことを言うな。人はみんな、したいことを、したいようにできる自由なくらしを望んでおるのだ。お前みたいに、大した事でもないのに、おおげさに、きまりだの、なんだの言っているのなら、世の中、きゅうくつでたまらんではないか。お前も自由にくらしてみろ。どんなに楽しいことが分かるはずだ。なあ、みんな。」

「はい、おっしゃるとおりで……」

ほかの二人の男たちも、王子のごきげんをとるように言った。

「いや、今、あなた方が言っている自由というのは、自分だけに都合のよいようにすることで、本当の自由とは申しません。それは、わがまま勝手というものです。」

決死のかくごでうったえるガリューの勢いにおされて、王子は言葉につまった。

「したいことを、したいようにされては、ほかの者はめいわくです。周りのことを考え、ご自分の心をおさえてください。」

「ええい、生意気な！ 私に意見をしようと言ったのか。」

「もし、本当に、あなた様がジェラル王子ならば、なおさう、手本となるよう、勝手なふるまいをつしんでください！」

「うるさい！ 王子にさからうとは無礼なやつ。こいつをいびりあげろー！」

とうとう、ガリユーは、逆に、とらえられ、ろうやにいられてしまった。

まもなく王様がなくなり、ジェラル王子が王位を受けつくと、ジェラルのわがままはいっそうひどくなった。それを見習って、国中の人々も、勝手なことを平気でやるようになり、世の中がみだれてきた。

ジェラル王のそばに仕える者も、せいたくなくらしをし、毎日、勝手きままにふるまっていた。なかには、ジェラル王にかわって、自分が王になろうと考え、ひそかにその機会をねらっている者もいた。そして、ついにジェラル王は裏切りにあい、とらわれの身となってしまった。

暗いどうくつに作られたろうやで、ジェラルがおくの方に目をやると、うす明かりの中に、一人の男が静かにすわっているのが見えた。

「ジェラル王、あなた様も、とうとう、自由をうばわれてしまいましたな。」と、低い声で語りかけてきた。

「そういうお前はだれだ。」

「お忘れになられるのも当然。私は、森の番人ガリユーでございます。」

「森の番人ガリユー？ おお、あのときの……わずかしが時がたたぬのに、すっかりやつれてしまったのう。」

しばらくの間、二人は向き合ったままだまっていた。

「ガリユー、あのとき、お前の言葉を受け入れ、わがまな心をただすことができたなら、このように国がみだれることもなかったであろうに……もう手おくれじゃのう……」

と、言って、はらはらと涙を流した。

しばらくして、ガリユーはろうやから出されることになった。ろうやを出るとき、ガリユーはジェラル王をふり返し、

「あなた様も、きつとそこから出られる日が来るでしょう。そうしたら、ごいっしょに、本当の自由を大切にして、生きてまいりましょう。」
と、言って、去って行った。



小学校 5・6年生 2学期 (家族や社会のためにはたらく)

「はじめてのアンカー」

1) 主題名 家族のために 内容項目4ー(5)

父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。

2) 展開の概要

- ねらい お父さんを追いかけるときのまきの気持ちを考えることを通して、家族を大切に思い、家族の一員として協力し、明るい家庭を築いていこうとする心情を育てる。

● 指導の流れ

場面1 (まきがあさみに運動会に父親が見にきてくれることを話す)

- Vサインを出したまきはどんな気持ちだったでしょう。

場面2 (父親が漁に出るしたくをしている)

- 父が漁に出ることを知ったとき、まきはどんな気持ちだったでしょう。

場面3 (お母さんの話を聞く)

- お母さんの話を聞いて、まきはどんな気持ちになったでしょう。

場面4 (お父さんを追いかけていく)(中心場面)

- ◎ まきはお父さんに何を伝えたかったのでしょうか。

3) 板書例

お父さんが一番楽しみにしていたのよ

- ・ お父さん、ごめんなさい
- ・ 気をつけて行ってきて
- ・ いい報告ができるようにがんばる

お父さん、待ってー



はじめてのアンカー

- ・ うれしい
- ・ がんばろう
- ・ お父さんにいいところを見せたい

- ・ お父さんが一番がまんしているんだ
- ・ 家族が大事だから、働いてくれているんだ



- ・ 約束したのになぜ代わるの
- ・ 他の人に代わってもらったらいいのに
- ・ やっぱり仕事が大事なんだ



4) 他の教育活動との関連等

- 家庭科・保健
- 心のノート 「わたしの原点はここにある」(5,6年用 96-99頁)

5) 読み物資料

はじめてのアンカー

学校の帰り道、友だちのあさみが灰色の空を見上げてため息をつきました。

「ああ、明日は小学校最後の運動会だっていうのに、晴れるかしら。」

「そうねえ。天気予報では晴れて出ていたけれど、そうだ、あさみさん《てるぼつず》を作らない？ 明日、晴れますように。」

まきの言葉に、あさみもうなずきました。

「ねえ、あさみさん。わたし、明日バトン落としならどうしよう。」

まきは、明日の運動会でリレーのアンカーに選ばれていました。それはまきにとって、六年間の学校生活で初めてのことでありました。

「平気、平気。なんだってうまくやってみようまきさんだもの。」

あさみが、まきに笑いかけました。

「あつ、船、船が帰ってきた。あの船は、たくさんランプをつけているから、サンマをとる船でしょ。」

あさみが、坂の向こうに見えている海のほうを指さしました。

「ピンポン。サンマは光が大好きだから、夜、たくさんランプをつけて漁をするんですって。」

まきは、漁船の乗組員であるお父さんから聞いた話を思い出していました。

「漁って大変なんですよ、あぶないこともいっぱいあって。」

「ええ。」

まきの声が小さくなりました。

「そのおかげで、おいしい魚が食べられるんだ。まきさんもお手伝いよくがんばってるね。」

あさみが、海とまきに向かって、ペコリとおじぎをしました。

「ところで、今年の運動会も、まきのお父さん、仕事で来れないの？」

「ううん。今度はね、今度は見に来てくれるの。」

まきは、あさみにVサインを出しました。

「よかった。いつも運動会するとき、まきさんさびしそうだったから。」

家に帰ると、お父さんが漁に出かけるしなくてはしていました。

「あつ、おねえちゃん。お父さんね。今夜、漁に出るんだって。」

二年生の弟のひろきが、泣きそつな顔で言いました。

「うそ……、うそでしょ。」

まきは、お父さんの前にしゃがみこみました。

「乗組員の井上さんが、急にぐあいが悪くなって、しかたがないのよ。」

まきのかたをたたくようにして、お母さんが言いました。

「悪いな、まき、ひろき。お父さん、船の上で応援しているからな。」

お父さんの言葉も、まきの耳に入ってきません。しょっぱいなみだがほほをつたって落ちていきました。

家の手伝いをしてから、まきは《てるてるぼつず》を作り始めました。

「まきちゃん。さっきは、お使いありがとう。まあ、《てるてるぼつず》を作っているの？」

おばあさんが、おやつを持ってそばにきました。

「なつかしいねえ。おばあちゃんも、おじいちゃんが生きていたころ、よく《てるてるぼつず》を作ったもんだ。雨のときの漁は、あぶないことが多いだろ。せめてお守りがわりについて。」

まきの持つ手が、止まりました。

「まきちゃんも、お父さんにあげるのかい。喜ぶよ、お父さん。」

「ちがうの、これは、明日の……。」

そう答えかけたまきのむねがチクリと痛みました。

「じゃあ、ふたりとも、運動会ではがんばるんだぞ。」

げん関先で、お父さんがふり返りました。

ひろきは、ほほをぶっとふくらませたままです。

「まき、ひろきのこと、たのんだぞ。いつものように、家のことや、おばあさんの手伝いもな。」

まきは、だまってうつむいていました。

お父さんは、かたをおとして、ゆっくりとげん関を出ていきました。

「お父さんが、いちばん運動会を楽しみにしていたのよ。きつと……。」

お母さんが、エプロンでなみだをぬぐいました。

まきは、へやにかけこむと、できあがったばかりの《てるてるぼつず》をスカートのポケットにおしこんで、げん関を飛び出しました。

「お父さん、待って——。」

まきは、夕焼けに染まった坂道を、走り続けました。

小学校 5・6年生 2学期 (家族や社会のためにはたらく)

「 ぼくの草取り体験 」

1) 主題名 役立つ喜び 内容項目4ー(4)

働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。

2) 展開の概要

- ねらい 子どもたちの遊んでいるようすを見て、ぼくがなぜうれしくなったのかを考えることを通して、みんなのために働くことの喜びに気づき、社会のために自分から進んで働こうとする態度を養う。

● 指導の流れ

場面1 (「学校を美しくする日」にうら庭の垣根の草取りをする)

- ぼくは草取りをしながらどんなことを考えていたでしょう。
- ていねいに草取りをする洋君を見て、ぼくはどう思ったでしょう。

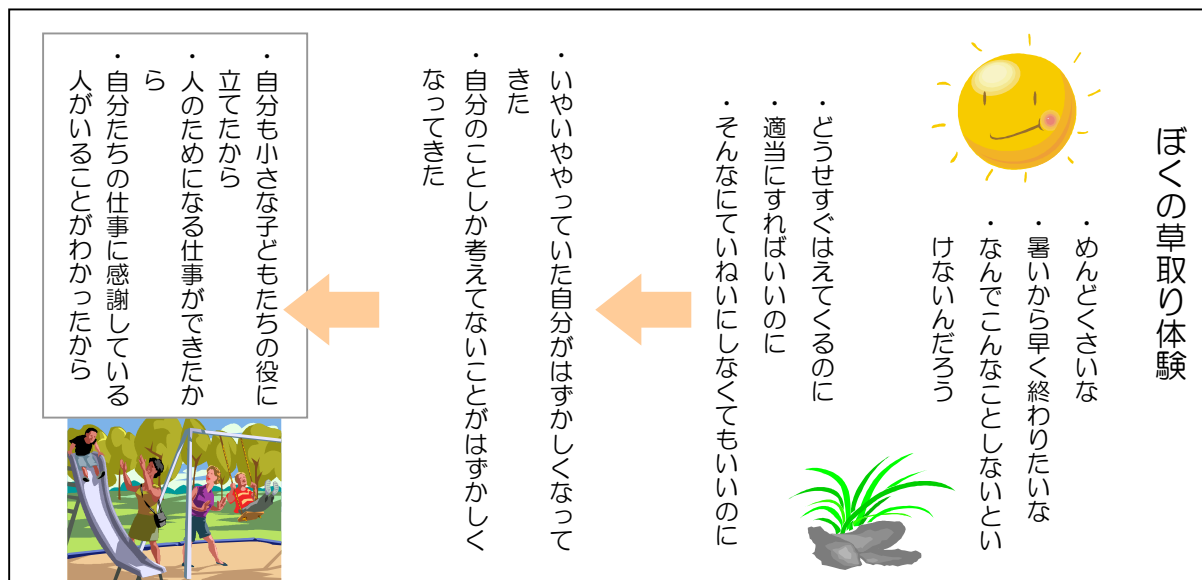
場面2 (楽しそうに話しながら、草取りをしている回りのおとなの人たちを見る)

- ぼくが、後ろめたく感じたのは、なぜでしょう。

場面3 (小さい子どもたちの笑い声が明るくひびく) (中心場面)

- ◎ 子どもたちの声を聞いて、うれしくなったのはどうしてでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 社会科・特別活動(勤労奉仕活動)
- 心のノート 「働くってどういうこと？」(5,6年用 92-95頁)

5) 読み物資料

ぼくの草取り体験

九月の「学校を美しくする日」のことだ。ぼくたち五年生の分担当は、うら庭の垣根のそばの草とりだった。

夏休みの間に草がのびほうだいになっていった。本当は、あまり気の進まない仕事だけれど、ぼくたちが低学年のときには、高学年の人たちにしてもらっていたことだ。やらないわけには、いかない。ぼくたちは、話し合って、まず全員でぬいた草をまとめておいて、あとからそれをビールぶくろにつめることにした。

みんないきおいこんで、競争のように草取りにかかった。でも、暑い夏の日が続いて地面がたかくなっているの、なかなか根っこまでぬけない。特にオオハコやカヤツリグサなどは、根が深く大変だ。ぼくは、めんどろになって草の上のほうだけを、ぶちぶちと引きちぎっていった。

ふと、となりを見ると、洋君は、短い草も根っこを残さずについてぬいてぬいている。ぼくのぬいたところと比べてみると、すいぶんきれいになっている。ぼくは、思わず回りを見た。みんなも、かたい根っこところは、そのままにして上の草だけをちぎっている。

「洋君は、なんでもていねいにする性格だから、根っこからぬいているけど、あんなにきれいにしたって、どうせすぐに草はのびるのになあ。」
ぼくは、心の中でそう思っていた。

次の日曜日は、町内清掃の日で、公園の草取りをすることになっていた。家から、だれか一人が参加すればよいということだった。たいていの家では、おとなの人が出ている。ところが、ぼくの家では、しんせきの家に急用ができて、父も母も出かけることになった。

「とおるは、よくあの公園で遊んでいるから、行ってくれなね。」

おとなの人ばかりが集まっているところは、てれくさいし、行きたくなかったけれど、そう言われて、しぶしぶ行くことにした。

公園に着くと、となりのおばさんに、

「おかあさんの代わりに来てくれたの。えらいわね。」

と、声をかけられ、はすかしくなった。うつむいたまま、学校のとこと同じよう

に、どんどん草を引きちぎっていった。

顔をあげると、洋君が来ていた。洋君は、やっぱりていねいに草をぬいている。

「洋君、きみの家はお母さんが来ているのに、どうしてきみまで……。」
と、聞くと、洋君は、照れたようにほほえみながら言った。

「ぼくは、この公園でよく遊び、おとなの人たちも、みんなが気持ちよく遊べるようにと、草を取ってくれているんだもの。」

ぼくは、楽しそうに話をしながら、草取りをしている回りのおとなの人たちを見た。いやいややっていた自分は、何だったんだろうと、後ろめたかった。

洋君とならんで、さっきよりもていねいに草を取り始めた。

次の日、学校からの帰り道に公園の横をとおりがかった。

公園がすっきりして広く見える。一年生くらいの子もたちが、元気にボール遊びをしていた。

草取りをしたため、公園全体を使って遊ぶことができるようになっていた。小さい子どもたちの笑い声が明るくひびいてきて、ぼくはうれしくなった。

洋君がいつのまにか、ぼくに追いついてきた。ぼくたちは、顔を見合わせた。子どもたちの遊んでいる様子を見ながら、きのうの草取りのことを思い出してにっこりした。

「ぼくたちも、公園でみんなといっしょに遊ぼうよ。」

「そっだね。みんなをさそってくるよ。」

ぼくたちは、かばんを置きに家に向かってかけた。

小学校 5・6年生 3学期 (夢や希望を持つ)

「ヘレンと共にーアニー・サリバン」

1) 主題名 くじけない心 内容項目1ー(2)

より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。

2) 展開の概要

- ねらい ねばり強くヘレンを導くアニーの心情を考えることを通して、より高い目標を立て、希望と勇気を持ってくじけずに努力しようとする心情を育てる。

● 指導の流れ

場面1 (校長先生から、ヘレンの家庭訪問をすすめられる)

- ヘレンの家庭教師をすすめられたとき、アニーはどんなことを考えたでしょう。

場面2 (手にスプーンを持たせて、いすにすわらせようとする)

- ヘレンがすわるまでのあいだ、アニーはどんなことを考えていたでしょう。

場面3 (まわりの人に教え方がきびしすぎるといふかげろが耳に入る) (中心場面)

- ◎ かげろが耳に入ったとき、アニーはどんな気持ちになったでしょう。

場面4 (ヘレンがアニーの手のひらに指で「WATER」と書く)

- ヘレンをしっかりと抱きしめたアニーは、どんな気持ちだったのでしょうか。

3) 板書例



・ほんとうにうれしい
・これまで続けてきてよかった
・これからもヘレンといっしょにがんばっていこう

い

私はヘレンのために
今のやり方を続ける
・もうやめたいな
・今やめたらヘレンの
わがままはなおらない

アニー

きびしすぎる
かわいそう



ヘレン

・六歳の女の子
・目、耳、口が、不自由

ヘレンと共に

・今まではまわりの人にお世話になったから、今度は人のためにがんばろう
・たいへんそうだけど、精一杯がんばろう

4) 他の教育活動との関連等

- 読書活動 (先人の伝記)・特別活動 (儀式的行事)
- 心のノート 「夢に届くまでのステップがある」(5,6年用 16-19頁)

5) 読み物資料

ヘレンと共にーアニー・サリバン

アニー・サリバンは、生まれつき視力が弱く、一時は失明したこともあり、パーキンズ盲学院に在学中、校長先生の計らいで、三度も手術を受け、再び視力を取りもどすことができたのです。

アニーは、このとき、目が見えるということがどんなにありがたく、また、すばらしいことか、よく分かりました。そして、この喜びと感謝の気持ちは、大きくなったら、目の不自由な人たちのために役立ちたいという決意に変わっていききました。

それからのアニーは、夢中になって勉強をしました。目や耳の不自由な人に教える指導法や点字、読唇術なども一生けんめいに学びました。

いつしか時が流れ、アニーは二十歳になりました。

卒業を目前にひかえた、ある日のことです。アニーは、校長室に呼ばれました。

「アニー。ヘレン・ケラーという六歳の女の子の家庭教師になってほしいという話があります。目と、耳と、口の、三つが不自由な子どもですから、教えるのにとっても苦労すると思います。しかし、あなたならできると信じています。」

アニーは、よく考えたすえに、その仕事を引き受ける返事をしました。

アニーは、おだやかな日ざしを受けて、ケラー家の玄関の前に、馬車からおりたちました。そのとき、女の子がものすごい勢いで走ってきて、思わずアニーにぶつかりました。それがヘレンだったのです。アニーはヘレンを抱きよせ、「まあ、なんてかわいい子でしょう。これから仲よくしましょうね」と、言いました。

次の日の朝食のときのことです。ヘレンはいきなり、お皿のものを手づかみで食べ始めました。そして今度は、アニーのお皿まで、手をのびてきました。お父さんも、お母さんも、ただだまって見ているだけです。

アニーは、思いきって、ヘレンの手を払いのけました。ヘレンは、みるみるうちに顔色を変えて、あばれだしました。それでもアニーは、手にスプーンを持たせていすにすわらせようとします。一時間、二時間……。とうとうヘレンはあきらめて、アニーのひざに寄ってきました。アニーはヘレンの頭をなでながら、(ヘレン、あなたがかわいいからよ、許してね)と、心の中で言いました。

ヘレンの教育は、まず、このわがままをなおすことだと決心したアニーは、お

父さんにたのんで、次の日から、庭にある小屋に二人だけで住むことにしました。アニーが、ヘレンのわがままをなおすために、きびしく教え始めると、

「サリバン先生の教え方は、きびしすぎる。あれでは、ヘレンがかわいそう。」というまわりの人のかげ口が聞こえてきました。けれども、いつか自分の考えが分かってもらえることを信じて、根気強くヘレンを導きました。

また、アニーは、指話法でヘレンに文字を教えました。手のひらに指で文字を書く、ヘレンも同じように書きます。しかし、それが文字だとは思っていませんでした。音も光もない世界にすんでいたヘレンは、この世に言葉や文字があることをさえ知らなかったからです。アニーは、何とかして、ものには名まえがあることを教えたいと思っていました。

初夏のある日、アニーとヘレンは、手をつないで庭を散歩していました。アニーは、ふとあることを思いついて、ヘレンを井戸ばたに連れて行きました。そして、ヘレンの手をとって、ポンプの口へ持っていく、流れる水を受けさせながら、別の手に、ゆっくりと「WATER(水)」と書きました。次に、早く同じ文字を書きました。

このとき、ヘレンは、ふいに忘れていたものを思い出すように「WATER」というのは、この手の上を流れる冷たいものことなんだーと気がついたのです。

ヘレンは、アニーの手のひらに、指で「WATER」と何度も書きました。アニーは大きくうなずいて、ヘレンをしっかりと抱きしめました。

その日は、二人にとって、強い自信が生まれた記念すべき日となったのです。このことをきっかけに、次々とももの名前と文字を覚えていきました。

やがて、ヘレンは上の学校に進み、とうとう大学に入學しました。アニーは、ヘレンといっしょに、雨の日も、風の日も、一日も休まず教室に通いました。そして、四年間、講義の内容を、ヘレンの手のひらに、水がさらさらと流れるような速さで書き続けたのです。

ヘレン・ケラーが、多くの困難にもくじけずに、世界中の身体障がい者の福祉のために働き、多くの人たちから「光の天使」と呼ばれるようになったのも、アニー・サリバンの心をこめてつくった努力があったからです。

後に、ヘレン・ケラーは、大学から、名誉博士号を授与されましたが、アニー・サリバンもまた、同じ学位を授与されたのです。

小学校 5・6年生 3学期 (夢や希望を持つ)

「天からの手紙」

1) 主題名 発見する喜び 内容項目1ー(5)

真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。

2) 展開の概要

- ねらい 雪の結晶を作ることができたときの喜びを考えることを通して、真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくしようとする心情を育てる。

● 指導の流れ

場面1 (3千枚の雪の結晶写真に見入る)

- 「息を飲んで…」見入る宇吉郎はどんなことを考えたでしょう。

場面2 (仲間が無理ではないかと言われたが、宇吉郎は考え続けた)

- 仲間にやっぱり無理なのかなと言われたとき、宇吉郎はどう思ったでしょう。

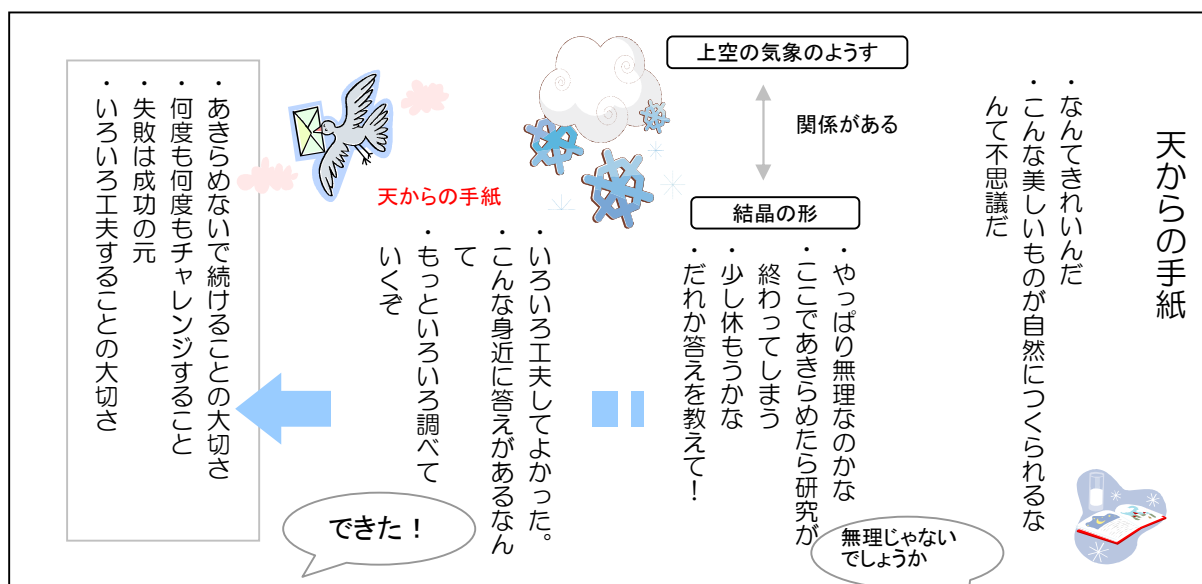
場面3 (うさぎの毛を使うと雪の結晶ができた)

- 仲間と肩をたたきあいながら、どんなことを考えたでしょう。

場面4 (真っ暗な庭に出て、かい中電灯を空に向けてみた) (中心場面)

- ◎ 天からの手紙から、上空の気象条件とともに何を学ぶことができたでしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 読書活動 (先人の伝記)・理科・社会
- 心のノート 「好奇心が出発点」(5,6 年用 28-31 頁)

5) 読み物資料

天からの手紙

中谷宇吉郎は、雪の研究で世界的に有名な科学者である。宇吉郎が、まだ若いころのことである。

ある朝の新聞に「アメリカの最新式除雪車が、日本の雪に動けなかった」という記事があった。それを読むうちに、日本とアメリカの雪のちがいに興味をもち、自分で調べてみたいと思った。

また、あるとき、山形県で雪のため枝が折れ、一晩のうちにサクランボの樹が全滅した話を聞いた。

「きのうの雪は、いつもより重かったんです。これで三、四年は収かくができません。どうしたらいいんだろう。」

という農家の人のなげきに、このような雪が、どんなときにふるのか分かれれば、枝折れの予防をすることもできるだろうと考えるようになった。

そんなある日、宇吉郎はベントレーという人の写真集を手にした。いく種類もの雪の結晶が三千枚ものっているものだった。

(何と美しい結晶だろう。自然の中に花が咲いたようだ。)

宇吉郎は、息をのんで見入った。

このことがきっかけとなり、前から心にかけてながらのびのびになっていた雪の研究を、本格的に始めようと決心したのだった。

(日本にふる雪の性質を研究しながら、雪の害を防ぐだけでなく、これを利用することもできるかもしれない。それにはまず、雪そのものをよく見ることから始めよう。)

宇吉郎は、札幌にある大学の研究室のろうかで、窓を開けはなって研究を始めた。ふっついている雪をガラス板の上に受けてけんび鏡でのぞいて見ると、そこには水晶細工のような雪の結晶が見えた。宇吉郎は、写真とはちがった美しさに心をうたれるのだった。

さらに、零下一五度の十勝岳でも観測をした。雪の結晶には、六花状や六角柱などのさまざまな形が見られた。また、気温や水じょう気の量が変わると、雪の結晶の形もさまざまな形に変わってくるのが分かってきた。

このようなさまざまな雪の結晶を調べた結果、結晶の形と天候との関係も少しずつわかってきた。

そこで、宇吉郎は、いろいろな状態の中で雪を作ることができれば、その結晶

の形から上空の気象のようすが分かると考えた。そして、何度も失敗をくりかえしながら、上空と同じように水じょう気の温度や量を調節できる小さな実験装置を、何とか作りあげたのである。

もっとむずかしかったのは、実験装置の中に、雪の結晶になる核を用意することだった。雪の結晶には、空中にうかんでいるちりや氷を核にすることができる。だが、小さな実験装置の中を上空に近い条件にする方法は、なかなか考え出せるものではなかった。

「小さな箱の装置では、やはり無理ではないでしょうか、」
研究室の仲間が言った。

しかし、宇吉郎は考え続けた。そして、装置の中に糸をつるして空にうかんでいる状態にすれば、糸を核にして雪の結晶ができるかもしれないと考えた。

最初、もめん糸をつるしてみた。だが、糸全体にしもがつき、ちよつと毛虫のような形になってしまった。ひつじの毛やくもの巢などもためしてきたが、どれも同じようなものだった。

そんなとき、研究室にうさぎの毛皮を着こんでいる仲間がいて、

「どの糸もだめなら、うさぎの毛はどうかなあ。」

とつぶやいた。何気ない一言だったが、宇吉郎は聞きのがさず、願いをこめて装置にうさぎの毛を取りつけた。

「ああ、できた。雪の結晶だ!」

宇吉郎は思わずさげんだ。一本のうさぎの毛に数か所、雪の結晶ができたのである。けんび鏡で調べたところ、うさぎの毛には、所々にこぶのあることが分かった。

「そうか、このこぶの部分が水でおおわれ、そこに雪の結晶ができるんだ。」

宇吉郎と研究室の仲間は、かわるがわるけんび鏡をのぞき、肩をたたきあった。

その後、雪の研究は進み、大雪や重い雪のふる予想がつくようになった。そして、交通や農作物のひ害の対策もたてられるようになったのである。

宇吉郎は、ある夜、真つ暗な庭に出て、かい中電灯を空に向けて見た。遠い遠い空のかたから、数知れない白い雪が限りなくまいおりてくる。耳をすますと、空でサラサラという音を立てているような気がした。この雪の一つぶの結晶が、上空の気象状態を教えてくれるはずである。(雪の結晶は、天から送られた手紙のようだ)と、宇吉郎は思っのだった。

小学校 5・6年生 3学期 (夢や希望を持つ)

「こころざしを高く、今を熱く生きる」

1) 主題名	内容項目1－(2)	関連項目4-(7)(8)
--------	-----------	--------------

より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。

2) 展開の大要

- **ねらい** 渋沢栄一の生き方を考えることを通して、高い目標を立て、自分のことだけではなく、まわりの人や社会のことと考えて生きていこうとする態度を養う。

- ## ● 指導の流れ

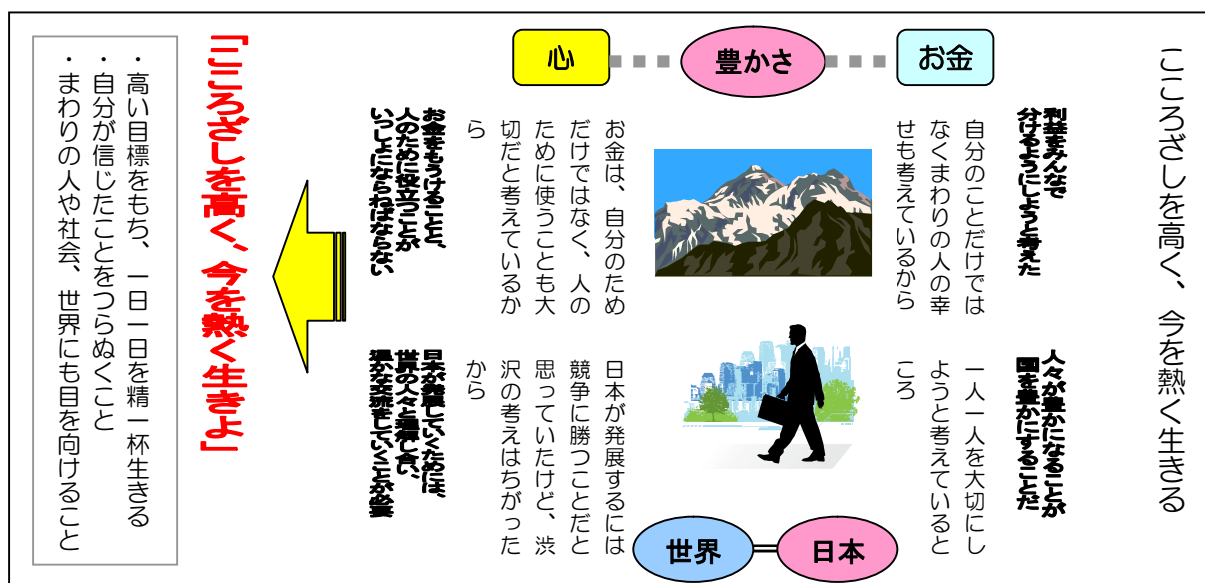
発問1 渋沢栄一の生き方で大切だなと思うところに線を引きましょう。

発問2 なぜ大切だと思うのですか。

発問3 なぜ、タゴールは渋沢と話していると、ヒマラヤの山々をながめているような気持ちになったのでしょうか。

発問4 「こころざしを高くもち、今日の一日を熱く生きよ。」とは、どういう意味でしょう。

3) 板書例



4) 他の教育活動との関連等

- 読書活動（先人の伝記）・特別活動（儀式的行事）
- 心のノート 「自分を見つめ はぐくみ とともに生きる」（5,6 年用 118-119 頁）
「心豊かに生きていくために…わたしのテーマ」（5,6 年用 120-121 頁）

5) 読み物資料

いじつやう高く、今を熱く生きる

大介は、机の前にすわったまま考えこんでしまった。卒業が近づき、先生から「将来どんな生き方をしたいか」を書いてくるように言われたからだ。

いつも父からは、「みんなの役に立つ生き方をしなさい。」と言われる。母からは、「心のやさしい人になりなさい。」と言われる。先生は、「自分の生き方は自分で決まなくてはだめだ、そのために勉強するのだ。」とおっしゃる。

大介は、どれも大切なことだと思う。将来、人の役に立つような大きな仕事をしてみたい。お金をもうけてぜいたくな生活もしたい。みんなと仲よく楽しく暮らしたい。これらはすぐに頭にうかぶ。だが、実際はなかなかむずかしそうだ。

社会科の学習で、大介は、日本は外国で必ずしも評判がよくないことを知った。大介の父も、外国に出張していたとき、そのようなことを感じたというのだ。

どうしてだろう。日本が外国とかかわりをもつて仕事をするようになったのは、明治時代からだ。最初は、アメリカやヨーロッパの国々に見習って産業を発達させ、今では、世界から注目される国になった。それは、日本の人々の勤勉さからだと言われるが、外国の人々からは、「お金ばかりもっている」とか、「自分の国のことしか考えていない」などと言われたりもする。

これらは、結局、自分のこれからの生き方と大いに関係するのではないかと大介は思った。そして、翌朝、このことを先生にたずねた。

先生は、一冊の本をわたしてくださった。渋沢栄一に関する伝記だ。「日本がどのように産業が発達し、国際社会の中で活躍していく基礎をきずいた代表的な人物が、渋沢栄一なんだよ。」とおっしゃった。

大介は、社会科の教科書をそばにおきながら、さっそく読んでみた。少しむずかしかったが、読んでいくうちに、渋沢栄一のスケールの大きな生き方におどろきながらも、やっぱり自分と同じことをなやんでいたのかとうれしくなった。

渋沢は、明治維新の一年前に、パリの万国博に参加するためフランスに行った。見るものすべてがめずらしく感動したが、大きなショックも受けた。日本がこれらの国々といっしょに仕事をしていくには、いち早くそれらの技術や制度をとり入れなければならないと思った。

帰国後、渋沢は、日本で最初の会社組織を作ったり、大蔵省の役人となって新しい日本の財政の仕組み作りなどを行った。しばらくして大蔵省をやめ、銀行の設立に全力を注いだ。銀行があれば、人々が貯金をしたお金を有効に使って、いろいろな事業を行うことができる。

渋沢は、これからの日本に本当に必要な会社を作り、利益をみんなに分けるようにしようと考えた。「人々が豊かになることが国を豊かにすることだ。」と確信していたからだ。製紙会社、ガス会社、化学肥料会社、保険会社、電気電話会社など、次々に会社の設立にかかわっていった。

渋沢には、「お金をもうけること、人のために役立つことが、いっしょにならねばならない。」という信念があった。一生けん命に働いてお金をもうけることはよいことだ。しかし、それは、自分一人の力ではなく、社会や人々の恩恵を受けてできることだ。だから、「もうけたお金の一部は、必ず社会のために使うことが義務だ。」と考えていた。

お金そのものは、よい悪いの判断をする力をもっていない。よいことに使われるか、よくないことに使われるかは、使う人の心の問題だ。お金をもうけることと、心を美しくすることを、同時に考えねばならない。こうして渋沢は、経済と道徳との一致を説き、学校や福祉施設の設立など、六百以上の社会事業にかかわった。

インドの世界的詩人タゴールも、来日したとき、渋沢に会い、「渋沢と話していると、ヒマラヤの山々をながめているような気持ちになる。」と語っている。

渋沢は、日本と世界の国々との友好にも力をつくした。日本が発展していくためには、世界の人々と理解し合い、温かな心の交流をしていくことが必要である。

渋沢は、経済にたずさわる人々が互いの国を訪問できるようにしたり、災害などで困っていれば、真っ先に寄付をしたり、外国をよく訪問するなど、心の交流の輪を広げていった。

日本とアメリカの関係が悪くなってきたとき、渋沢は、日本人形とアメリカ人形とを国際親善の使者として交かんすることを提案した。そのことは、「青い目をしたお人形は……」という歌にもなり、人々の心をやわらげた。

渋沢の夢は、心が安らぎ、幸せに暮らすことができる魅力的な街やふるさとを作ることであった。東京にある田園調布は、当時田園地帯であったところを、放

射線状に区画を整備し、緑と安らぎに包まれた街を作ろうと渋沢がとりくんだものだ。

大介は、これらをまとめながら、先生からだされた課題は、すぐに書けるような気がしてきた。「ここを高くもち、今日の一日を熱く生きよ。」という渋沢の言葉が、聞こえてきそうだった。

出典 文部省道徳教育指導資料（指導の手引き） 4